

20『涙を数える』成井豊十真柴あずき

○ジャンル／時代劇

○ストーリー／安政6年（1859年）9月、上田藩士・長谷川鏡吾は21歳。8歳の時、父が公金横領の罪で切腹。以来、母・淑江と二人で暮らしてきた。ある日、幼なじみの舟橋明一郎が父・舟橋貞蔵を斬って、江戸へ逃亡。鏡吾は藩の命令で、目付の南条朔之助とともに、江戸へ向かう。江戸藩邸に着いた二人は、世話役の大佛聞多とともに、明一郎を探す。鏡吾は、明一郎の妹・樹雨から、兄を助けてくれと頼まれていた。もちろん、鏡吾も助けたかった。が、南条は、明一郎が抵抗した場合、問答無用で斬ると言う。南条は上田藩随一の剣士で、明一郎はもちろん、鏡吾にも歯が立たない腕前だった……。

○出演者／男5＋女2＝計7

○上演時間／120分

登場人物

長谷川鏡吾（上田藩士）

舟橋明一郎（上田藩士・鏡吾の友人）

大佛聞多（上田藩士）

南条朔之助（上田藩士）

舟橋貞蔵（上田藩士・明一郎の父）

長谷川淑江（鏡吾の母）

舟橋樹雨（明一郎の妹）

安政五年五月一日朝、上田藩内を流れるの千曲川の川原。長谷川鏡吾が木刀を振っている。そこへ、舟橋明一郎がやってくる。明一郎は旅装をして、風呂敷を背負い、竹筒を腰に提げ、袋に入った木刀持っている。

明一郎

鏡吾、朝っぱらから精が出るな。

鏡吾

(振り返って) 何だ、おまえか。(再び木刀を振り始める)

明一郎

「何だ」だと？ 呆れたな。それが三年ぶりに会った友に言う言葉か。

鏡吾

他に何を言えばいいんだ。

明一郎

いろいろあるだろう。「元氣だったか」とか、「会いたかったぞ」とか。

鏡吾

元氣なのは見ればわかる。

明一郎

そうでもないぞ。昨夜は歩き通しだったから、くたくただ。

鏡吾

だったら、さっさと家へ帰れ。

明一郎

冷たいやつだな。せっかくおまえに会うために、遠回りして来たのに。

鏡吾

俺が頼んだわけじゃない。

明一郎

変わらないな、おまえは。

鏡吾

たったの三年で変わってたまるか。

明一郎

俺は変わったぞ。何しろ、江戸の水で洗われたからな。どうだ。前より男振

鏡吾

りが上がったと思わないか？

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

鏡吾

明一郎が荷物を下ろし、袋から木刀を取り出す。二人が向かい合い、木刀を構える。

明一郎

来い、鏡吾。

鏡吾が打ち込む。明一郎が受けて、打ち返す。激しい打ち合い。鏡吾が打ち込む。明一郎がかわす。

明一郎 懐かしいな。江戸へ行く前は、毎日ここで稽古をしたっけ。夏は、稽古が終
わると、素っ裸になって、川へ飛び込んだ。冬は川原で焚き火をした。
鏡吾 無駄口を叩くな。

鏡吾が打ち込む。明一郎が受けて、打ち返す。激しい打ち合い。鏡吾が打ち込む。明一
郎がかわす。

明一郎 大したもんだ。道場にも通わずに、ここまで技を磨くとは。
鏡吾 剣の修業など、一人でもできる。
明一郎 それは俺への皮肉だな？

明一郎が打ち込む。鏡吾が受けて、打ち返す。激しい打ち合い。鏡吾が打ち込む。明一
郎が受けて、よろめく。

鏡吾 どうした。三年も修業をしてきたくせに、この程度か。

明一郎 手厳しいな。昨夜は寝てないと言っただろう。

鏡吾 勝負しようと言ったのはおまえの方だぞ。

明一郎 勝負ではない。手合わせをしようと言っただ。

鏡吾 同じことだ。行くぞ。

明一郎 まあ、待て。続きはまた今度にしよう。少し休ませてくれ。

鏡吾 だらしないぞ、明一郎。

明一郎 (深呼吸して) やっぱり上田の風は気持ちがいいな。江戸は人が多いだろう。
やたらと埃っぽくて、あれだけは参った。

鏡吾
明一郎

鏡吾
明一郎

鏡吾
明一郎

鏡吾
明一郎

鏡吾
明一郎

鏡吾
明一郎

好きで行ったくせに、文句を言うな。

（土手に座って、竹筒の水を飲みながら）いや、俺は江戸へ行って本当によかつたと思ってる。おかげで、たくさんの知り合いができた。俺が通った練兵館には、日本中から若い剣士が集まっていたんだ。

練兵館？ 流派は何だ。

神道無念流。師範は斎藤弥九郎という人で、やたらと稽古が厳しかった。その上、学問にも熱心で、道場の横には蘭学塾があった。兵学でも砲術でも、好きなものが学べたんだ。

（土手に座って）砲術は、藩校で習ったと言ってなかったか？

一通りはな。しかし、あんなものはもう古い。おまえ、長崎に海軍伝習所ができたのは知ってるか？（鏡吾に竹筒を差し出す）

（受け取って）海軍伝習所？

五年前、浦賀に黒船が来ただろう。それで、幕府が慌てて作ったんだ。伝習所では、オランダ人が本物の蒸気船を使って、航海術を教えている。長州藩はそこに二十人近くの藩士を送ったそうさ。すごいと思わないか？

別に。俺は異人にものを教わりたいとは思わん。

俺も以前はそうだった。しかし、長州のやつらは、それは間違いだと言った。異人に勝つには、まず相手をよく知ることが肝心だと。おかげで、すっかり目が覚めた。

おまえも伝習所に入りたくなつたのか。

その通りだ。早速、親父に文を送ったら、全く聞く耳を持たない。「早く帰国しろ」の一点張りだ。とうとう仕送りを止めるとまで言われて、仕方なく帰ってきたというわけだ。

鏡吾 舟橋様が怒るのも、無理はない。そもそも、江戸での修業は一年限りだったはずだ。

明一郎 一年では足りなかった。三年でも足りなかった。まさか、またすぐに江戸へ戻ると言うのではないだろうな？

鏡吾 いや、今度は長崎へ行きたいと思っっている。

明一郎 勘定奉行の息子が航海術を学んで、何になる。

鏡吾 俺は親父の跡を継ぐつもりはない。上田藩より、日本を何とかしたいんだ。今のままでは、清国のように、異国に食い荒らされてしまう。日本を一刻も早く、強い国にすること。それが俺の使命だと思っっている。

鏡吾 ずいぶん話が大きくなったな。俺には付き合いきれん。

明一郎 そうは行かない。俺の望みは、いつかおまえと二人でこの国を動かすことだ。明一郎、頭を冷やせ。俺の身分でそんなことができると思うか？

鏡吾 弱気なことを言うな。俺にはおまえが必要なんだ。

明一郎 どうして俺が。

鏡吾 俺はすぐ頭に血が昇る。おまえのように、冷静な男に舵を取ってもらわないと駄目なんだ。いいな、鏡吾。俺のそばにいてくれ。頼んだぞ。

鏡吾 かし。

明一郎 あー、腹が減った。今から急げば、朝飯に間に合うかもしれん。鏡吾、また明一郎が去る。鏡吾が竹筒に気づき、持ち上げる。

鏡吾 おい、明一郎、忘れ物だ。

鏡
吾
が
去
る
。

安政六年八月一日昼、江戸の上田藩上屋敷。鏡吾・南条朔之助・大佛聞多がやってくる。

聞多 この部屋をお使いください。生憎、他に空きがないので、相部屋になります

が。

南条 構わん。どうせ寝に帰るだけだ。

聞多 長旅でお疲れでしょう。今、お茶を淹れてきます。

南条 気遣いは無用。たかが五十里の道、屁でもない。

聞多 でも、木曾街道は峠が多いんでしよう？ 国元からいらっしゃる方は皆さん、

聞多 げっそりした顔をなさっていますよ。こちらの方のように。

鏡吾 私は江戸へ来たのは初めてなので。

南条 (聞多に) おぬし、名前は。

聞多 申し遅れました。納戸役をしております、大佛聞多です。お二人が江戸にい

南条 らっしゃる間、私がお世話をさせていただきます。

鏡吾 目付役の南条朔之助だ。

南条 (聞多に) 長谷川鏡吾です。私は役には就いておりませんが、今回に限り、

聞多 南条殿の補佐を仰せつかりました。

南条 なるほど。で、今回のお役目というのは？

聞多 おぬしに話す必要があるか？

聞多 南条 聞多 南条 聞多 鏡吾 聞多 鏡吾 南条 聞多 南条 聞多 南条 聞多 南条

私は江戸生まれの江戸育ち。江戸について知らないことは一つもありません。きつとお役に立てると思えますよ。

よかろう。ただし、この件は家老しか知らぬ。他言は無用だ。

ご安心ください。私の口は潰け物石より固い。

五日前、勘定奉行の舟橋貞蔵殿が斬殺された。下手人は子息の舟橋明一郎。

息子が父親を？ 本当ですか？

俺はこの目で遺体を見た。斬り傷は一つ。肩から脇腹へかけて、ざっくりやられていた。家にいた者の中で、それだけの腕を持つのは、明一郎ただ一人。しかも、やつはその夜から姿を消した。

で、明一郎さんは今、江戸に？

事件の翌朝、木曾街道を東へ向かう姿が目撃されている。我々は殿の上意を受けて、江戸へ来た。見つけ次第、討ち取れとのご命令だ。

大佛殿はご存じありませんか。明一郎は一年前まで、この上屋敷にいたのです。

さあ、ここには何百人も住んでますからね。

歳は私と同じ二十一。練兵館という道場に通っていたそうです。

さあ、外の道場に通っている人もいっぱいいますし。

おぬし、知らないことは一つもないと言わなかったか？

それで、理由は？ 明一郎さんはなぜ自分の父親を手にかけたんです。

やつは勤皇思想にかぶれていた。秘かに脱藩を企てていたという噂もある。

父親の舟橋殿とは、喧嘩が絶えなかったそう。

なるほど。練兵館に通っていたんじゃないや、勤皇に傾くのも無理はない。あそこには長州藩の連中がたくさん通ってますから。

鏡吾
聞多
鏡吾
聞多

南条
聞多
鏡吾
南条

聞多
南条
鏡吾
南条

聞多
南条
聞多
南条

それは明一郎から聞きました。
長谷川さんは明一郎さんと親しかったですか？
ええ、まあ。家が近かったのです。

つまり、幼馴染みということですか。そんな人を討つなんて、さぞかし辛いでしょうね。

余計な同情はやめろ。この役目を無事に果たせば、長谷川には褒美が出る。褒美って？ 禄を増やしてもらえますか？

南条殿、その話は大佛殿には。

別に隠しておくこともあるまい。いいか、大佛。長谷川の父親は亡くなった舟橋殿と同じ勘定役だった。ところが、今から十三年前、公金横領の罪で切腹させられたのだ。

切腹？

長谷川の家は、お取り潰しこそ免れたものの、役を解かれ、禄を十分の一に削られた。(鏡吾に) その時、おぬしは幾つだった。八つです。

(聞多に) 長谷川は組屋敷を追い出され、町外れの長屋に引っ越した。以来十三年、貧しい暮らしをしてきたわけだ。しかし、明一郎を討てば、元の暮らしに戻る。城に出仕できるのだ。

しかし、なぜ長谷川さんが討ち手に？ 人は他に幾らでもいるでしょうに。首実験のためだ。俺は明一郎の顔を知らぬ。

なるほど。で、探索はどこから始めます？

まずは、妹に話を聞きたい。明一郎の妹は、半年前からここで奥勤めをしているのだ。名前は舟橋樹雨。知っているか？

聞多
南条
聞多
南条
聞多

さあ、奥勤めをしている人もいっぱいいますから。
おぬし、本当は江戸のことなど、何も知らないのではないか？
そんなことはありませんよ。名所旧跡、神社仏閣、おいしい蕎麦屋ももんじ
屋、知りたいことがあったら、何でも聞いてください。
ももんじ屋になど興味はない。樹雨をここへ連れてこい。
はい、ただいま。

聞多が去る。

南条
鏡吾
南条
鏡吾
南条
鏡吾
南条
鏡吾
南条
鏡吾
南条
鏡吾

江戸の人間はどうも虫が好かん。あれが俺と同じ上田藩士とは思えん。
南条殿、あなたは私の父をご存じだったのですか？
なぜそんなことを聞く。
十三年前のこと、やけに詳しく話されていたので。
直接の面識はない。しかし、おぬしの父親が起こした事件は、藩内で大評判
になった。何しろ、一介の勘定役が三千両もの大金を横領したのだからな。
私は父は無実だったと信じています。
しかし、おぬしの父親は罪を認めただぞ。
それでも、私は父を信じています。
おぬしが今日まで貧しい暮らしをしてきたのは誰のせいだ。おぬしの父親の
せいではないか。
私は今の暮らしを辛いと思ったことは一度もありません。
健気なことを言う。しかし、おぬしは紛れもなく、重罪人の息子だ。役に就
きたければ、明一郎をその手で討つしかないのだ。そのことを忘れるな。

聞多が戻ってくる。

聞多 南条さん、樹雨さんは生憎、お仕事中でした。しばらく手が放せないそうです。

南条 我々は上意で動いている。そのことは伝えたのか。

聞多 それはもちろん。しかし、樹雨さんは姫君と本を読んでいる真っ最中で。姫君に「邪魔するな」と叱られてしまいました。

鏡吾 南条殿、樹雨殿に話を聞くのは後にしませんか。先に明一郎が立ち回りそうな場所を探すんです。

聞多 (南条に) 明一郎さんは家から金を持ち出したんですか？

南条 いや、着の身着のまま出ていったらしい。

聞多 それなら、金を持っていく人から当たった方がいいでしょうね。国元と違って、江戸では何をするにも金が必要ですから。

南条 そんなことはわかっている。

聞多 私なら、まず最初に練兵館へ行きますね。そこで明一郎さんと親しくて、なおかつ金持ちって人を探すんです。

南条 俺に指図するのか。

聞多 とんでもない。提案しているだけですよ。

南条 明一郎は江戸に三年いた。その間に知り合った人間は百人を超えるだろう。まずはそのすべてを割り出すんだ。長谷川は練兵館へ行け。明一郎が通っていた間、道場に入りしていた者の名前を調べるんだ。大佛は今、上屋敷に

南条 いる者の名前を紙に書き出せ。

鏡吾

南条

聞多

南条

聞多

鏡吾

南条

聞多

南条

聞多

南条

聞多

南条

聞多

南条殿は？

品川の下屋敷へ行く。あちらにも、明一郎の知り合いがいるかもしれん。

練兵館へはお二人で行った方がいいんじゃないですか？もし明一郎さんと

出くわしたら、斬り合いになるかもしれない。

案ずるな。長谷川は一年前、国元の御前試合で明一郎を破っている。

本当ですか？長谷川さんて、強いんですね。見かけに寄らず。

いや、あれはただのまぐれです。

謙遜するな。おぬしが討ち手に選ばれたのは、剣の腕が見込まれたからでも

あるんだ。大佛、長谷川に練兵館の場所を教えてやれ。

確か、九段坂下のあたりだと思えますが、私は行ったことがなくて。

知らないのか？ だったら、江戸の絵図を持ってこい。

絵図ですか。どこにあったかな。

もういい。自分で探す。(歩き出す)

待ってください。南条さん。私も一緒に探しますよ。

南条・聞多が去る。

①安政五年五月十日昼、舟橋家。舟橋樹雨がやってくる。湯呑みを載せた盆を持っている。

樹雨 鏡吾様、お茶をお持ちいたしました。

鏡吾 ありがとうございます。

樹雨 本当にお久しぶりですね。お元氣そうで何よりです。

鏡吾 樹雨殿こそ。三年の間に、ずいぶん背が伸びましたね。

樹雨 今年で十七になりましたから。父には毎日のように、嫁に行けと言われてい

ます。

鏡吾 まだ予定はないのですか？

樹雨 私のようなじゃじゃ馬をもらってくださる方はなかなかいらっしやいません。

鏡吾 それより、どうしてもっと早くおいでにならないかったですか？ 兄が江戸

から帰ってきて、今日で十日目ですよ。

樹雨 私もう子供ではない。用もないのに、お邪魔するわけには行きません。

鏡吾 でも、兄は毎日、首を長くして、待っていました。私もです。

樹雨 樹雨殿は変わりませんね。背は伸びたが、心は昔のままだ。

舟橋貞蔵・明一郎がやってくる。

貞蔵
鏡吾
明一郎

待たせてすまなかつたな。こちらから呼びつけておいて。いいえ。私の方こそ、長らく無沙汰をして、申し訳ありませんでした。

堅苦しい挨拶は抜きだ。父上、ご用件を。

そう急くな。樹雨、茶ではなく、酒を持ってこい。

いけません。お医者様に止められているのをお忘れですか？

一杯だけなら構わんだろう。酒は百葉の長と言うではないか。

父上の場合は、百害あって一利なしです。母上に言いつけますよ。

わかったわかった。酒は話が済んでからにしよう。

父上。

樹雨、親子喧嘩は抜きにして、茶を頼む。うんと濃いのを淹れてきてくれ。

樹雨
明一郎

承知いたしました。

樹雨が去る。

貞蔵

樹雨のやつ、近頃ますます母親に似てきた。口うるさくて、かなわん。一刻も早く、嫁のもらい手を見つけて、この家から追い出さんと。

奥様のお加減はいかがですか？

変わりない。何、少々、心の臓が弱いだけだ。安静にしていれば、心配ない。

父上、世間話も抜きにしてもらえませんか。

どうしたんだ、明一郎。やけに気が立っているな。

自分に腹を立てているんだ。父上を信用した俺が馬鹿だったと。

またそれか。その文句は、この十日で百回は聞いたぞ。

明一郎
貞蔵

これが最後です。鏡吾の前で、今一度、言わせてください。

貞蔵

好きにしろ。

明一郎

三年前、父上はこう仰いました。鏡吾のことは俺に任せろと。

貞蔵

ああ、覚えている。

明一郎

それなのに、一年経っても二年経っても、鏡吾は無役のまま。何度催促の文を書いて、梨のつぶて。要するに、父上は何もしていなかったんです。

鏡吾

おい、よせ。

明一郎

おまえは腹が立たないのか。三年も待ちぼうけを食わされて。いや、正しくは十二年だ。おまえの父上が亡くなってから。

鏡吾

やめろ、明一郎。俺の家が無役になったのは、舟橋様には関わりのないこと。

明一郎

俺のために運動してくださる必要などないんだ。

鏡吾

父上はおまえの烏帽子親ではないか。それなりの責任というものがある。

明一郎

明一郎。

貞蔵

明一郎の言う通りだ。鏡吾が元服を迎えた時、俺は出仕のことは任せろと胸を叩いた。

明一郎

その言葉は嘘だったというわけですか。

貞蔵

時機を待っていたのだ。我が藩の財政は年々苦しくなるばかり。人を増やすには、殿のご承認が必要なのだ。

明一郎

そこを何とかするのが、父上の腕の見せ所でしょう。違いますか？

樹雨

樹雨が戻ってくる。湯飲みを載せた盆を持っている。

貞蔵

兄上、大きなお声を出さないください。母上が心配します。

樹雨

いつものことだ。こいつは鏡吾のことになると、すぐに頭に血が昇る。

貞蔵

明一郎

貞蔵

明一郎

貞蔵

明一 貞蔵 鏡吾 貞蔵 明一 貞蔵 明一 鏡吾 明一 貞蔵 貞蔵 鏡吾 貞蔵 鏡吾 樹雨

もう気が済みました。用件を仰ってください。

鏡吾。おまえ、御前試合に出る気はないか。

御前試合ですか。私にそんな資格はありません。

明一郎から聞いています。おぬしの剣の腕は明一郎に勝るとも劣らんと。

しかし、私は道場に通っておりません。御前試合に出られるのは、藩内の道

場の代表者のみと聞いております。

それは俺が何とかする。出場者は高名な剣士ばかりだ。一度でも勝てば、殿

のお目に留まるかもしれん。

どうする、鏡吾。

どうと言われても、あまりに急で。

おまえの気持ちはよくわかる。話が違うと言いたいんだろう。俺だって、最

初に聞いた時は頭に来た。俺が父上に頼んだのは、おまえを役に就けること

だ。それなのに、御前試合に出るとは、遠回りにも程がある。

おまえは反対なのか。

そうは言ってません。父上にできることがこれしかないのなら、受けるしか

ない。

結局、賛成なのではないか。いちいち面倒なやつだ。

鏡吾、出る。今のおまえなら、必ず勝てる。優勝だって、夢じゃない。

しかし。

迷っている暇はないぞ。御前試合は十日後だ。

（鏡吾に）この前、約束しただろう。二人で国を動かすと。そのためにはま

ず今の身分から抜け出すことだ。無役のままでは話にならない。

兄上。

明一郎

（鏡吾に）まさか自信がないのか。俺と手合わせをした時の気迫はどこへ行った。

鏡吾

明一郎

わかつた。舟橋様、御前試合への出場、謹んでお受けいたします。よく言つた。父上、早速、手配をお願いします。善は急げだ。今すぐ、出かけましょう。（歩き出す）

貞蔵

明一郎

待て待て。なぜおまえまで行く必要がある。（立ち止まって）またな、鏡吾。十日の間、しっかり腕を磨けよ。

明一郎・貞蔵が去る。

樹雨

鏡吾

樹雨

鏡吾

樹雨

鏡吾

樹雨

鏡吾

樹雨

鏡吾

樹雨

鏡吾

樹雨

すみません、鏡吾様。兄が失礼なことを言つて。

あなたが謝ることはありません。

江戸へ行けば、少しは落ち着きが出るかと思つたら、ますます口が悪くなつて。時々、父がかわいそうになります。

舟橋様は酒を止められていると仰いましたね。どこかお悪いのですか？

今年のお正月に飲み過ぎて、胃を壊してしまいました。大事を取つて、一月

ばかり勤めを休んだんです。

見た目は以前と変わりませんでした。

兄が戻つて、すっかり元氣になりました。喧嘩相手がいるぐらいの方が、張

り合いがあつていいんだと思います。

それは私にもわかる気がします。

鏡吾様。御前試合でのご武運、お祈りいたします。

ありがとうございます。精一杯戦います。

樹雨が去る。
② 長谷川家。長谷川淑江がやってくる。

淑江 それはよいお話をいただきましたね。舟橋様にはちゃんとお礼を言いましたか？

鏡吾 誰が礼など。ふぎけるなと叫びたいのを必死で堪えました。

淑江 まあ、どうしてですか。

鏡吾 母上、ちゃんと聞いていましたか。これは出仕の話などではない。舟橋様は、

明一郎のしつこさに根を上げただけ。御前試合に私を出すことで、体裁を保

とうとしていただけなんです。第一、舟橋様は私が勝てるとは思っていない。

どうせ恥をかくだけだと思っっているんです。

淑江 では、お断りするのですか？

鏡吾 逆ですよ。何が何でも、最後まで勝ち抜きます。舟橋様に、目に物を見せて

淑江 やりますよ。

鏡吾 鏡吾、落ち着きなさい。そのような考えで試合に臨んでも、いい結果は出せ

淑江 ませんよ。

鏡吾 なぜです。

淑江 剣には、その人の心が表れます。邪な心で剣を振ってはなりません。

鏡吾 母上がそこまで剣にお詳しいとは知りませんでした。

淑江 あなたのお父上は藩内に並ぶ者のない、剣の達人でした。そのお姿を見てい

鏡吾 ば、大抵のことはわかります。

鏡吾 その父上を見殺しにしたのは誰です。舟橋様ではないですか。

鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑
吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江

何を言うんです。
父上に疑いがかけられた時、あの方は何をしてくれました。勘定役の同僚で
ありながら、庇おうともしてくださらなかった。父上が自裁されるまで、た
だ黙って見ていただけではないですか。
それは違いますよ。舟橋様はできるだけのことをしてくださいました。長谷
川家を残してほしいと、上役の方に掛け合ってくださいだったので。
しかし、父上が腹を切るのには止めなかった。
それは仕方ないことだったのです。父上はご自分で罪をお認めになったので
すから。
母上は父上が本当に横領をしたと思っているのですか？
いいえ、父上は無実です。父上に限って、人の道に外れるようなことをなさ
るはずがありません。私はそう信じています。
それは私も同じです。
あの時、父上が最後まで抵抗していたら、長谷川家は終わっていました。父
上はご自分の命と引き換えに、あなたと私を守ってくださいだったので。
わかっています。そのことを忘れた日は一日もありません。
だったら、舟橋様を悪く言うのはやめなさい。あの方に悪気はない。今度の
御前試合も、あなたによかれと思って、勧めてくださったのです。
母上は人がよすぎる。舟橋様は今では勘定奉行です。広大な屋敷に住んで、
息子を江戸へ三年も行かせる余裕がある。私たちは米の飯さえろくに食えな
いのに。
やめなさい、鏡吾。それ以上、愚かなことを口にしてはなりません。
母上。

淑江

鏡吾

淑江

鏡吾

淑江

鏡吾

たとえどんなに暮らしが貧しくとも、心まで貧しくなったらおしまいです。人として生きる意味はありません。

わかっています。わかっています。

今度、舟橋様にお会いしたら、素直にお礼を言うのと約束してください。

母上がそう仰るなら。

それからも一つ。御前試合では、まっすぐな心で剣を振ると約束してください。

さい。いいですね？

わかりました。約束します。

淑江が去る。

安政六年八月一日夜、江戸の上田藩上屋敷。南条がやってくる。

南条
鏡吾

長谷川、練兵館はどうだった。
館長の斎藤弥九郎殿にお会いしてきました。事情をお話ししたら、快く協力してくださって。これが、明一郎と付き合いがあった者の名前です。(紙を広げて)全部で十八人いました。

南条

俺は道場に入りしていた者の名前をすべて調べろと言ったはずだぞ。

鏡吾

しかし、練兵館は江戸でも一に二を争うほど大きな道場です。門人だけで、千人以上。とても一枚の紙には収まりません。

南条

言い訳は無用。俺は下屋敷にいる者の名前をすべて調べてきた。(紙を広げて)全部で三十四人だ。(紙を見比べて)俺の方が多いな。

鏡吾

この中で、明一郎と付き合いがあった者は？

鏡吾

藩校で一緒だった者が一人いた。そいつに会って、話を聞いてみたが、江戸へ来てからは一度も連絡を取っていないそうさ。そちらの十八人はどうだ。私が会えたのは、×印をつけた五人だけです。五人とも、明一郎の行方は知らないと言っていました。

南条

残るは十三人か。明日また練兵館へ行って、そいつらに話を聞いてこい。

聞多がやってくる。

聞多 南条さん、お帰りなさい。聞きましたよ、御前試合の話。

南条 いきなり何を言い出す。

聞多 私と同僚が教えてくれたですよ。南条さんは若い頃、御前試合で優勝した

南条 そうですね。しかも、五年連続で。あんまり強いんで、その次の年からは呼

聞多 ばれなくなっただけですって？

南条 俺の話と同僚にしたのか。まさか、明一郎の件は漏らさなかっただろうな？

聞多 それはもちろん。南条さんがどんな人か知りたくて、それとなく聞いてみた

南条 んです。

南条 俺のことより、調べはどうした。上屋敷にいる者の名前は書き出したのか。

聞多 はい、この通り。(紙を広げて) 全部で百九十六人でした。(紙を見比べて)

鏡吾 私が一番多いですね。

聞多 この中で、明一郎と付き合いがあった者は？

南条 さあ、名前を書くのが忙しくて、そこまでは。

聞多 おぬしという男は、人に言われたことしかできないのか。明日はここに名前

南条 のある者全員に会って、明一郎から連絡がなかったか聞き出せ。

聞多 全員に？ そんなことをしたら、明一郎さんの件がバレてしまいますよ。

南条 だったら、他の方法で、明一郎と付き合いがあった者を見つけ出せ。

鏡吾 (聞多に) それで、樹雨殿はどうでした？ まだ仕事中でしたか？

聞多 いいえ、ちょうど手が空いたところでした。そろそろいらっしやると思うん

南条 ですよ。

樹雨がやってくる。

樹雨 失礼いたします。
聞多 お待ちしていましたよ。さあ、中に入ってください。

鏡吾・聞多・南条が慌てて紙を片付ける。

聞多 (樹雨に) ご紹介します。こちらは国元からいらっしゃった、目付役の南条さん。そして、こちらは――

鏡吾 お久しぶりです、樹雨殿。

樹雨 (頭を下げる)

聞多 そうか。お二人は既に知り合いだったんですね。ひよっとして、子供の頃から？

南条 久闊を叙している暇はない。(樹雨に) おぬしの父の話は聞いたか。

樹雨 先程、ご家老様から伺いました。

南条 それなら、話は早い。我々は明一郎を追って、江戸へ来た。おぬし、居場所に心当たりはないか。

樹雨 いいえ。

南条 ならば、この二、三日の間に、明一郎から文が来なかったか。

樹雨 いいえ。

南条 本当か。隠すためにならんぞ。

鏡吾 南条殿、そのような言い方はおやめください。まるで脅しではありませんか。
南条 おまえは黙っている。

鏡吾 南条 鏡吾 南条 鏡吾 南条 聞多 南条 鏡吾 南条 聞多 南条 鏡吾 南条 鏡吾

樹雨殿は正直な人です。この人が知らないと言ったら、本当に知らないのです。

やけに肩を持つな。さてはおぬし、この女に深い仲なのか？

今、何と仰いました？

怒るな。冗談だ。

へえ、南条さんも冗談を言うんですね。

(鏡吾に)たとえ正直な人間でも、家族を守るためなら嘘をつく。この女の言葉を鵜呑みにするわけにはいかん。

しかし、明一郎は妹思いの男です。自分が仕出かしたことに、樹雨殿を巻き込むとは思えません。

ならば、なぜ父親を斬った。斬れば、当然、妹にも累が及ぶ。そのことは、明一郎にもわかっていたはずだ。

それは一理ありますね。

(鏡吾に)おおしが幼馴染みを庇う気持ちはわからんでもない。が、今の明一郎は卑怯者だ。そのことはよく肝に命じておけ。

南条殿、明一郎の居場所が判明したら、まず私に話をさせてください。なぜだ。

私の知る限り、明一郎は断じて卑怯者ではありません。舟橋様を斬ったのは、そうせざるを得ない事情があったからだ。私にはそうとしか思えないのです。

その事情を、私に確かめさせてください。いい加減にしろ、長谷川。我々は上意を受けてここにいる。明一郎は、見つ

け次第、斬る。それ以外の道はないと思え。しかし――

南条 聞多 樹雨 南条 聞多 樹雨 南条 聞多 樹雨

南条 樹雨 南条 樹雨 南条 樹雨 南条 樹雨

やめてください、お二人とも。樹雨さんの前でする話ではありませんよ。私は構いません。兄が罪を犯したのは事実ですから。

お兄さんが斬られてもいいと仰るんですか？

はい。兄のことはもう諦めました。

聞いたか、長谷川。おまえより、余程、肝が座っている。

南条様、お願いいたします。どうか一日も早く、兄を見つけてください。何だと？

先程、私はご家老様に帰国を願い出ました。しかし、ご家老様は、兄が見つかるまで帰国はならぬと仰せでした。父が亡くなった今、国元の家には母一人しかおりません。母は心の臓が弱く、寝たり起きたりの暮らしをしています。一日も早く、そばに行つてやりたいのです。

わかった。できるだけ急ぐと約束しよう。

これで話は終わりですね。樹雨さん、どうぞ奥へお戻りください。

その前に、鏡吾様と話がしたいのですが。

話とは。

身内の話です。失礼ですが、鏡吾様と二人だけにしていただけませんか？

大佛、下がれ。

私だけ？ 南条さんは出ていかないんですか？

（樹雨に）たとえ身内の話であろうとも、俺は同席させてもらう。おぬしを疑うわけではないが、万が一ということがある。

承知いたしました。それでは、大佛様もお聞きください。

いいんですか？ では、遠慮なく。

鏡吾様、去年、父が胃を悪くしたことは覚えていらつしやいますか？

鏡吾 樹雨 鏡吾 樹雨

鏡吾 樹雨

鏡吾 樹雨

鏡吾 南条 樹雨 南条

南条・樹雨が去る。

聞多 鏡吾 聞多

ええ、確か、酒を飲み過ぎたと。

実は、それだけではなかったのです。父は不治の病に罹っておりまして。

本当ですか？

私もつい一月前まで知りませんでした。母が文で報せてきたのです。折りを

見て一度、帰国するようにと。

そのことは明一郎も知っていたのでしょうか。

母は話していないそうです。もし知っていたら、兄は父を斬らなかつたと思

います。

なぜその話を私に？

鏡吾様にも知っておいていただきたかったです。父には残れた日々がわず

かしかなかつた。それなのに、手をかけるなんて、兄は愚か者です。

樹雨殿。

（樹雨に）話はそれだけか。

はい。お手間を取らせました。

待て。念のために、おぬしの部屋を改めさせてもらおう。案内しろ。

なんとも気の強い人ですね。実のお兄さんを愚か者だなんて。驚きました。半年前とは別人でした。

江戸に来て、心が鍛えられたんです。すみません。ついカッコいいことを言つてしまいました。

鏡吾
聞多

すみません。聞いてませんでした。
長谷川さんて、意外と意地悪なんです。そろそろ夕餉の時刻です。支度が
できたかどうか、聞いてきます。

聞多が去る。

安政五年五月二十日昼、上田城の道場。貞蔵がやってくる。風呂敷包みと竹筒を持っている。

貞蔵

鏡吾、弁当を持ってきてやったぞ。

鏡吾

ありがとうございます。しかし、今は腹は減っておりません。

貞蔵

そう言わずに、握り飯の一つも食え。せっかく樹雨が拵えたのだ。

鏡吾

では、試合の後でいただきます。

貞蔵

では、せめて水を飲め。(竹筒を差し出して) それとも、酒の方がよかったですか？

鏡吾

いいえ、水で結構です。(受け取って) いただきます。(飲む)

貞蔵

驚いたぞ。おまえがここまで残るとは。あと二人に勝てば、上田で一番強い

鏡吾

のはおまえということになる。舟橋様、この度は私のためにご尽力いただき、誠にありがとうございます。

貞蔵

いや、礼を言われるほどのことはない。おぬしの父親は、上田の麒麟児と呼ば

鏡吾

ばれるほどの剣豪だった。その息子だと言ったら、すぐに許可が下りた。

貞蔵

私は父ほど強くありません。

鏡吾

しかし、ここまで残ったのはおまえの力だ。あと二試合、気を引き締めてか

貞蔵

かれ。

明一郎がやってくる。鉢巻きと袴をつけて、木刀を持っている。

明一郎 鏡吾、間もなく、俺たちの試合だ。支度をしろ。

鏡吾 次の相手はおまえなのか？

明一郎 どうした。俺では不服か？

鏡吾 いや、きつとそうなると思っていた。

鏡吾が去る。

貞蔵 まさか、おまえたち二人が戦うことになるとはな。俺は一体どちらを応援す

ればいいんだ。

明一郎 鏡吾を応援してやってください。優勝すれば、必ず殿のお目に留まる。

貞蔵 しかし、父親が息子の負けを願うわけにはいかん。

明一郎 私は父上の応援がなくても、立派に戦ってみせます。

貞蔵 全く可愛げのないやつだ。おまえには握り飯を食わせてやらん。

鏡吾が戻ってくる。木刀を持っている。鉢巻きと袴をつける。

明一郎 父上、席にお戻りください。気が散りますので。

貞蔵 わかったわかった。二人とも、しつかりやれよ。

貞蔵が去る。

鏡吾 あんな言い方をすることはないだろう。せっかく励ましに来てくださったの

明一郎 今も顔も見たくない。見れば、文句が言いたくなる。

鏡吾 江戸から呼び戻されたのが、そんなに気に入らないのか。

明一郎 俺は何度も頭を下げた。一年だけでいい、長崎へ行かせてくれと。ところが

鏡吾 親父は、明日からでも城へ出ろと言う。勘定役の見習いとして。

明一郎 それは仕方ないだろう。おまえは舟橋家の跡取りだ。

鏡吾 俺は金勘定には興味がない。しかし、親父は譲らない。勤めを断るなら、仕

明一郎 送りした金を返せと迫ってきた。

鏡吾 金を返せ？ 舟橋様のお言葉とは思えんな。

明一郎 親父は焦っている。もうすぐ五十になるからな。隠居する前に、俺を扱いて、

鏡吾 奉行の地位を継がせるつもりなんだ。馬鹿馬鹿しい。

明一郎 明一郎、父親を悪く言うのは、男としてみっともないぞ。

鏡吾 そうだな。親父のことは忘れて、試合に集中しよう。次の相手はなかなか手

強いな。

鏡吾 今度は途中で音を上げても、容赦しないぞ。

明一郎 いいとも。その生意気な口から、血へどを吐かせてやる。行くぞ、鏡吾。

鏡吾と明一郎が向かい合って立つ。礼をして、木刀を構える。鏡吾が打ち込む。明一郎

明一郎 がかわして、打ち返す。激しい打ち合い。鏡吾が打ち込む。明一郎がかわす。この前より調子がいいな。

鏡吾 おまえこそ。

明一郎が打ち込む。鏡吾がかわして、打ち返す。激しい撃ち合い。明一郎が鏡吾の小手を打つ。

鏡吾 今のは浅い。本気を出せ、明一郎。
明一郎 黙れ。

明一郎が打ち込む。鏡吾が受けて、鏢迫り合い。二人が離れて、構え直す。明一郎が打ち込む。鏡吾が受けて、よろめく。明一郎が鏡吾の面に打つ。鏡吾がかわして、明一郎の面に打つ。寸止め。

明一郎 参った。
鏡吾 待て。まだ決まってる。
明一郎 いや、十分だ。おまえの勝ちだ、鏡吾。

鏡吾が走り去る。明一郎が「鏡吾！」と叫びながら、後を追う。その前に、貞蔵が立ち塞がる。

貞蔵 どうした、明一郎。鏡吾はどこへ行った。
明一郎 わかりません。急に怒った顔をして、出ていったんです。
貞蔵 ひよっとすると、厠かもしれん。緊張で腹を下したのだ。
明一郎 それならいいんですが。とにかく、後を追いかけてます。

貞蔵

待て、明一郎。試合の結果は残念だったが、実に見事な剣裁きだった。江戸で過ごした三年は、無駄ではなかったよ。だ。な。

明一郎
貞蔵

そう思うなら、あと一年だけ、私の好きにさせてください。その話は終わったはずだ。

明一郎が去る。後を追って、貞蔵が去る。
長谷川家。鏡吾がやってくる。木刀を放り出す。淑江がやってくる。

淑江

何事です、鏡吾。

鏡吾

すみません。

淑江

ずいぶん早いお戻りですね。もう試合が終わったのですか？

鏡吾

申し訳ありません、母上。

淑江

まあ。その様子だと、最後まで残れなかったのですね。でも、あなたが存分に戦ったのなら、それでいいではありませんか。

鏡吾

違います。私は試合を途中で投げ出しました。怒りを抑えることができません、逃げてきたんです。本当にすみません。

明一郎が走ってくる。

明一郎

鏡吾、おまえ、何を考えている。

淑江

明一郎殿、どうなさったのです。

明一郎

叔母上、鏡吾をお借りします。(鏡吾に) 城へ戻れ。今戻れば、決勝に間に合う。

鏡一 鏡一 鏡一 鏡一 鏡一 鏡一 鏡一 鏡一 鏡一 鏡一
 明一 明一 明一 明一 明一 明一 明一 明一 明一 明一
 郎 吾 郎 吾 郎 吾 郎 吾 郎 吾 郎 吾 郎 吾

出ていけ。

鏡吾。

今すぐ、俺の前から消えろ。おまえの顔は二度と見たくない。どういふことですか。試合で何かあったのですか？

何かどころではあります。鏡吾は、決勝まで勝ち残ったんです。それに、黙って城を出た。理由も言わずに帰ってしまっただけです。

本当ですか、鏡吾。

(明一郎に)消えろと言ったはずだぞ。

一体俺の何が気に食わないんだ。はっきり言え。

とぼけるな。自分でよくわかっているだろう。

わからないから聞いていよう。

最後の一手だ。おまえ、わざと面を遅らせたな。

俺が？なぜそんなことをしなければならぬんだ。

俺を勝たせるためだ。憐れみをかけたんだ。

それは違う。

だったら、なぜ手を抜いた。答えろ。

俺は本気だったぞ。最初から最後まで。

そんなはずはない。俺は一瞬、体勢を崩した。それなのに、おまえは打ち込

んでこなかつた。しかも、あんな浅い面を十分だなどと。どこまで俺を馬鹿

にすれば、気が済むんだ。

十分だと思つたのは俺だけではない。審判殿も認めたではないか。

俺は認めない。おまえを一生許さない。

聞いてくれ、鏡吾。おまえは思い違いをしているんだ。

鏡吾 黙れ。おまえとの付き合いは、これで終わりだ。

鏡吾が去る。

明一郎 おい、鏡吾！

明一郎 明一郎殿、お待ちください。今の鏡吾は、何を言っても聞きませんよ。

明一郎 しかし、このままでは。

明一郎 しばらく時間を置いたらいかがです。子供の頃も、そうやって仲直りしてい

明一郎 たではないですか。

明一郎 叔母上からも、よく言い聞かせてください。あいつは誤解しているんです。

明一郎 本当に誤解なのでですか？ あなたは鏡吾のために、勝ちを譲ろうとなさった

明一郎 のではないですか？

明一郎 いやだな、叔母上まで。私がそんなことをするわけないでしょう。

明一郎 優しい方ですね、明一郎殿は。お父上にそっくりです。

明一郎 私は父とは違います。鏡吾のこと、よろしくお願いします。

明一郎 お気をつけて。

明一郎が去る。淑江も去る。

安政六年八月五日夕、江戸の上田藩上屋敷。聞多がやってくる。木刀を二本持っている。一本を床に置き、もう一本で素振りを始める。鏡吾がやってくる。

鏡吾

珍しいですね、大佛さんが木剣を振るなんて。

鏡吾

この五日間、働きづめでしたからね。無性に体を動かしたくなって。長谷川

聞多

さんも一緒にどうです。(木刀を差し出す)

鏡吾

私は遠慮しておきます。一日中歩き回って、くたくたなんです。

鏡吾

そんなことより、明一郎と付き合があった者はわかりましたか？

聞多

それが意外と少なくて。(紙を広げて)明一郎さんは練兵館に入り浸りで、

鏡吾

ここには寝に帰ってくるだけだったようです。

聞多

(紙を見て)全部で十二人ですか。これは南条さんに見せない方がいいですね。これっぽっちかと馬鹿にされます。

鏡吾

わかりました。すぐに処分します。で、長谷川さんの方は？

聞多

練兵館で付き合があった者は全部で十八人。今日、最後の一人に会ってきましたが、その人も連絡はないと言っていました。

鏡吾

つまり、空振りだったわけですか。頼みの綱は南条さんですね。あの人は今日

鏡吾 麴町の蘭学塾へ。明一郎が一時期、通っていたらしいんです。
聞多 あまり望みはなさそうですね。明一郎さんはこのまま永遠に見つからないん

鏡吾 じゃないですか？
不吉なことを言わないでください。

聞多 気晴らしに、手合わせをしませんか？ 一本勝負で。

鏡吾 さっき言ったでしょう。私はくたくたなんですよ。

聞多 そう仰らずに、一本だけ。長谷川さんは御前試合で明一郎さんに勝ったんで

鏡吾 すよね？ ぜひご教示をお願いします。(木刀を差し出す)

鏡吾 わかりました。一本だけですよ。(受け取る)

鏡吾と聞多が向かい合って立つ。礼をして、木刀を構える。鏡吾が打ち込む。聞多がかわす。鏡吾は何度も打ち込むが、聞多はすべてかわす。鏡吾が激しく打ち込む。聞多がかわして、体勢を崩す。鏡吾が打ち込む。聞多が鏡吾の木刀を弾いて、鏡吾の面に自分の木刀を振りおろす。寸止め。

鏡吾 参りました。

聞多 しくじったな。もっとやりたかったのに、つい、体が動いてしまいました。

鏡吾 あなたの打ち込みが強かったからですよ。

聞多 失礼ですが、大佛殿はどこで剣を学ばれたんですか？

鏡吾 どこと言われても。この道場で、人並みに。

聞多 嘘だ。それだけで、こんなに強くなれるわけない。

鏡吾 そう言うあなただって、まともに道場に通ってないですよね？

鏡吾 なぜわかるんですか？

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾
聞多

あなたの剣は荒々しい。まるで夏の嵐のようだ。そんな剣を教える道場は、どこにもありませんよ。
申し訳ありませんでした。(頭を下げる)
なぜ謝るんです。
私はあなたを見くびってしまいました。簡単に勝てる相手だと。
そこまで正直に言われると、かえって清々しいですね。

南条・樹雨がやってくる。

南条

聞多

南条

聞多

南条

長谷川、大佛、こつちへ来い。今から、この女の詮議をする。
詮議とは穏やかじゃありませんね。樹雨さんが何かしたんですか？
この女は俺たちに嘘をついていた。明一郎の居場所を知っていたんだ。
本当ですか？
俺はこの目で見た。この女はここを抜け出して、神田明神へ行った。そこで、二本差しの男と会った。歳は三十前後。残念ながら、その男には逃げられたが。

(樹雨に) その人は誰です。明一郎さんの知り合いですか？

白石様という方です。練兵館の門人の。

長州の白石殿ですか？ その方なら、最初に練兵館へ行った時に会いましたよ。明一郎とはかなり親しかったようですが、あいつが国元へ帰ってからは、

連絡を取ってないと行ってしまいました。

馬鹿め。おぬしは騙されたんだ。

(樹雨に) それで、その白石さんに会った目的は？

南条
聞多

樹雨
鏡吾

樹雨

兄のことを聞きに行つたんです。昨夜、兄からもらった手紙を整理していたら、白石様のことが書いてあるのを見つけて、もしかしたら、居場所をご存じかもしれないと思つて。

南条 おかしいな。神田明神で会つたということは、事前に待ち合わせをしたということだろう。

樹雨

私が今朝、文を送りました。すぐにお会いしたいと。

南条 そんなにうまく行くものか。本当のことを言え、樹雨。おぬしは前から白石と会つていたのだろう。白石はおぬしと明一郎の繋ぎ役なのだ。

樹雨

違います。

鏡吾 いや、違わない。言え。明一郎はどこだ。(樹雨の腕をつかむ)
南条殿、乱暴はやめてください。(樹雨の腕をつかむ)

鏡吾が南条の肩をつかむ。南条が鏡吾の手を振り払う。樹雨を転ぶ。南条が鏡吾の背中に手刀で打つ。鏡吾がひざまずく。

聞多

南条さん、何をするんです。

南条 (鏡吾に) 下っ端が口を出すな。(樹雨の腕をつかんで) 隠すためにならんと言つたはずだぞ。

鏡吾

やめろ！(南条に木刀を向ける)

南条

どういうつもりだ。

鏡吾

その手を放してください。樹雨殿は何も知らないんです。

南条が樹雨を突き飛ばし、抜刀する。

聞多
南条

やめてください、南条さん！
騒ぐな。少々、痛い目に遭わせるだけだ。（刀の峰を下にして持つ）

南条が鏡吾に打ち込む。鏡吾がかわして、南条に打ち込む。南条が受けて、鏡吾に打ち込む。鏡吾がかわす。南条が刀を構え直す。刀の切っ先が体の後ろに隠れる、変則的な構え。鏡吾が打ち込む。南条がかわして、鏡吾の左腕を打つ。鏡吾がひざまずく。南条が打ち込む。聞多が木刀で南条の刀を払う。鏡吾が立ち上がる。聞多が鏡吾の腕をつかむ。

聞多
南条

（鏡吾に）ここまでにしましょう。あなたに勝てる相手じゃない。
邪魔するな、大佛。

大佛
南条

そう言わずに、刀を納めてください。仲間割れなんてみつともないですよ。
仲間だと？ 笑わせるな。

聞多
南条

上屋敷の中で刃傷沙汰はまずい。人が来る前に早く。
（納刀する）

聞多
鏡吾

（鏡吾に）無茶をしないでください。肋を折られるところでしたよ。
申し訳ありません。（ひざまずく）

樹雨
南条

鏡吾様。（鏡吾に歩み寄ろうとする）
（立ち塞がって）どうだ。答える気になったか。

樹雨
南条

先程申し上げたことがすべてです。
あくまでシラを切るつもりか。もういい。白石本人に話を聞けば、わかることだ。

聞多
南条

今から白石さんに会いに行くんですか？　もうすぐ夕餉の時間ですよ。
飯など食っている場合か。(樹雨に)　明一郎の逃亡を手助けしたら、おぬしも罪に問われる。覚悟しておけ。
でも、相手は長州藩士です。いきなり押しかけても、会ってはもらえませんが。

聞多・南条が去る。

樹鏡
鏡吾

鏡吾様、お怪我はありませんか？
私は大丈夫です。それより、樹雨殿は。
ちよつと転んだだけです。ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。
いや、謝るのはこちらの方です。いくらお役目とは言え、南条殿のやり方は乱暴すぎる。今日だって、私には蘭学塾へ行くと言ったのに、あなたの後をつけた。あの人は最初からあなたを疑っていたんです。
駄目ですね。私は嘘が下手で。

樹鏡
鏡吾

嘘？
何もかも、南条様の仰った通りです。私は白石様のお力を借りて、兄と連絡を取ってました。
本当ですか？　それじゃ、明一郎の居場所も。
それは知りません。兄がどうしても教えてくれないので。(懐から手紙を出して)　これが先程もらった、兄からの文です。先日、鏡吾様が江戸にいらっしやったことを伝えたら、二人だけで会いたいと言ってきました。お会いになりますか？

鏡 吾

樹 雨

鏡 吾

樹 雨

鏡 吾

樹 雨

鏡 吾

樹 雨

鏡 吾

樹 雨

鏡 吾

樹 雨

鏡 吾

もちろんです。明一郎にそう伝えてください。わかりました。でも、その前に約束してください。兄を斬らないと。

樹 雨 殿。

兄は父をその手にかかけました。けっして許されることではありません。しかし、私は兄まで失いたくないのです。

樹 雨 殿のお気持ちはよくわかります。しかし、私は明一郎を討ち取るために、

ここへ来たのです。

お願いします。兄を助けてください。どうか。(頭を下げる)

申し訳ないが、約束はできません。しかし、明一郎に会ったら、まずはあいつ

の話の聞きまます。なぜ舟橋様を斬ったのか。あいつを討ち取るかどうかは

その後で決めまます。兄にそう伝えます。返事が届いたら、すぐにお知らせいたし

ます。

お願いします。

樹 雨 が 去 る 。

安政六年二月一日昼、舟橋家。貞蔵がやってくる。

貞蔵 鏡吾、やっと来てくれたか。
鏡吾 舟橋様、御前試合では、せっかくのご厚意を無駄にして、申し訳ありませんでした。

貞蔵 そんなことはいい。半年も前の話を今さら蒸し返すな。

鏡吾 承知しました。それで、今日はどのようなご用件で？

貞蔵 おまえ、近頃の明一郎をどう思う。

鏡吾 私はあの試合以来、明一郎と会っておりません。噂では、勘定役の見習いと

貞蔵 して働き始めたと聞きましたか。

鏡吾 それだけか。他には何も聞いてないのか。

貞蔵 ええ、何も。明一郎がどうかしたのでしようか？

鏡吾 おまえ、佐久間象山という男を知っているか。

貞蔵 いいえ。

鏡吾 隣の松代藩の兵学者だ。滅法頭の切れる男で、江戸で塾を開いていた。しか

し、今から四年前、門下生の一人が事件を起こした。黒船に乗り込み、メリ

ケンへ渡ろうとしたのだ。

鏡吾 黒船に？ そんなことが許されるのですか。

貞蔵
鏡吾
貞蔵

無論、直ちに投獄された。長州の吉田松陰という男だ。では、その佐久間という方にもお咎めが？

ああ。今は国元で蟄居している。とは言え、来客とは自由に会えるらしい。日本全国から、勤皇派の連中が訪ねてくるという話だ。

ひよつとして、明一郎もそこへ行っているのですか？

俺が止めても、聞く耳を持たん。近頃は勘定役のお勤めも、病と称して休んでいる。このまま放っておいたら、藩を脱けると言い出しかねん。

まさか。いくら何でも、脱藩までは。鏡吾、おまえから明一郎に言ってくれんか。おかしな考えは捨てて、勤めに
出ると。あいつは、おまえの言うことなら耳を貸す。この通りだ。

そこへ、明一郎がやってくる。

明一郎
貞蔵
明一郎
鏡吾
明一郎
貞蔵
明一郎
貞蔵
明一郎

父上、お話があります。

後にしろ。来客中だ。驚いたな。鏡吾じゃないか。

舟橋様、私はこれで失礼します。(立ち上がろうとする) まあ、待て。おまえも聞いてくれ。おまえにも関わりのある話なんだ。

鏡吾、座れ。喧嘩になつたら、仲裁を頼む。父上、樹雨を江戸の藩邸へやるというのは本当ですか。

誰に聞いた。母上です。もう決まったことだと。

ああ、そうだ。藩命により、江戸藩邸の奥勤めをすることになった。

明一 貞蔵 明一 貞蔵 明一 貞蔵 明一 貞蔵 明一 貞蔵 鏡吾 明一 鏡吾 明一 貞蔵 明一 貞蔵 明一 貞蔵 明一 貞蔵

なぜ私に黙っていたんです。
おまえに断る必要はない。舟橋家の主は俺だ。
私は樹雨の兄です。たった一人の。私には、樹雨を守る責任があります。
どういう意味だ。俺が無理強いをしていると言うのか。
その通りです。樹雨は上田を出たいとは望んでないんですから。
樹雨がそう言ったのか。
言わなくてもわかります。私は断固反対です。鏡吾、おまえもそうだろう。
俺に聞くな。他人が口を出せる話ではない。
樹雨がなくなってもいいと言うのか？
舟橋様の話を聞いてなかったのか。これは藩命なんだ。
藩命などどうでもいい。俺はおまえの意見を聞いてるんだ。
そこまですておけ。鏡吾には関わりのない話だ。
大いにありますよ。私も鏡吾も、樹雨の幸せを願っているんです。
娘の幸せを願わん親がいると思うか。
だったら、江戸へなど行かせないでください。鏡吾、何とか言え。
明一、おまえは間違っている。これは樹雨が望んだことなのだ。
そんな馬鹿な。
馬鹿はおまえだ。自分は好き勝手なことをしているくせに、樹雨の幸せが聞いて呆れる。
行こう、鏡吾。
どこへ。
樹雨に確かめるんだよ、本当の気持ちを。俺や父上に言えないことでも、おまえにならきつと言う。

貞蔵
明一郎
鏡吾

明一郎、いい加減にしろ。
鏡吾。
やはり失礼する。俺にできることは何もない。(貞蔵に) 御免。

鏡吾が去る。

明一郎
貞蔵
明一郎
貞蔵
明一郎
貞蔵
明一郎
貞蔵
明一郎
貞蔵
明一郎
貞蔵

おい、鏡吾！
待て、明一郎。見苦しい真似はやめろ。
見苦しい？ 何がです。
わからないのか。おまえはおまえの不満を鏡吾に押しつけたいだけだ。
違います。私は樹雨のためを思つて。
何度も言わせるな。江戸へ行くと決めたのは樹雨なんだ。
樹雨が喜んで承知したとは思えません。本当のことを言つてください。
俺は藩命に従えと言つただけだ。それがいやなら、嫁に行けと。
嫁に？ 一体、誰の。
相手などいくらでもいる。仮にも勘定奉行の娘だぞ。今まで、どれだけ縁談があつたと思う。樹雨がまだ早いと言うから、苦労して断つてきたんだ。
そういうことでしたか。
何も知らなくせに、偉そうな口を叩くな。

貞蔵が去る。
安政六年二月十一日昼、淑江・樹雨がやってくる。

淑江

すみませんね。鏡吾は出かけてるんですよ。反物を届けに行っただけなので、すぐに戻ると思いますが。

明一郎

反物とは、叔母上が織られた紬ですか。

淑江

ええ、この頃やっと思いついたものが織れるようになりました。十二年もかかってしまいましたけど。

明一郎

(樹雨に) 今度、おまえも何か織ってもらったらどうだ。

樹雨

兄上、そういうことを気軽に仰ってはいけません。叔母上に失礼ではないですか。

淑江

(明一郎ち) まあ。一本取られましたね。

明一郎

この頃、こいつに口で勝てる気がしなくなりました。

淑江

それにしても、樹雨さんにお会いするのは何年ぶりかしら。

樹雨

四年ぶりです。兄が江戸へ行く時、二人でご挨拶に伺いました。

淑江

そうでしたね。すっかりお綺麗になられて。

明一郎

お世辞はおやめください。本気にしますから。

淑江

私は本気で申しました。

樹雨

叔母様、私は今度、江戸へ行くことになりました。

淑江

明一郎殿でなく、樹雨さんがですか？

樹雨

藩邸で奥勤めをいたします。国元へ戻るのは、何年先になるかわかりません。

淑江

今まで本当にお世話になりました。

淑江

私は何もしていませんよ。

鏡吾がやってくる。

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

淑江・明一郎が去る。

樹雨殿。

鏡吾、早くこちらへ。樹雨さんが江戸へ行かれるそうですよ。

ええ、伺っています。

まあ、なぜ教えてくれなかったんですか。(樹雨に) ご出立はいつです？

明日です。

明日？

本当はもっと早くご挨拶に来るつもりだったのですが、父が樹雨を親戚に連れ回しまして。

樹雨さん、少しお待ちいただけますか。お渡ししたいものがありますので。

ついでに水を一杯飲ませてください。急いで来たから喉がカラカラだ。

水なら俺が持つてくる。

おまえはいい。俺は叔母上の水が飲みたいんだ。

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

鏡吾

あいつ、何を言ってるんだ。

よかった。仲直りができたんですね。

え？

喧嘩なさっていたんですよね、兄と。私はそれだけが心残りだったんです。

樹雨殿、俺は明一郎と縁を切りました。もう以前のように付き合うつもりは

ありません。

どうしてですか。

それは言えません。

樹雨
鏡吾

樹雨

鏡吾
樹雨

鏡吾

樹雨
鏡吾

樹雨
鏡吾

淑江・明一郎が戻ってくる。淑江は風呂敷包みを持っている。

淑江

樹雨

淑江

鏡吾
淑江
樹雨

兄が何かしたんですね。鏡吾様を怒らせるようなことを。

確かにあの時は目が眩むほど腹が立ちました。しかし、後になって、気づきました。明一郎は友として当然のことをしたただけだと。

それなのに、元には戻れないのですか？

ええ。鏡吾様は兄と顔を合わせたくなかったのですね？ それなのに、いきなり押

かけて、申し訳ありませんでした。どうか、明一郎が無理に引つ張ってきたんでしよう。

違います。私が兄に頼んだのです。鏡吾様に会わせてほしいと。

樹雨殿、私のことはお忘れください。鏡吾様。私は二十一になっても、勤めの叶わぬ身。忘れた方がいいんです。

樹雨さん、これをお持ちください。私が織った帯です。こんなものしか差し

上げられなくて、申し訳ないけれど。（風呂敷包みを差し出す）

遠慮なくいただきます。（受け取って）ありがとうございます。まだ私たちが組屋敷に住んでいた頃、あなたにお会いするのが楽しみでした。

娘がほしいと思っていたので。母上、あまりお引き留めしてはご迷惑です。

そうですね。樹雨さん、どうかお気をつけて。叔母様もどうかお元気で。

淑江
玄関まで、お見送りしましょう。

樹雨・淑江が去る。

明一郎 鏡吾、樹雨を家まで送ってくれ。俺はちよつと用事を思い出した。

鏡吾 嘘をつくな。おまえも帰れ。舟橋様とちゃんと話をしろ。

明一郎 なぜ親父の名前が出てくるんだ。

鏡吾 おまえ、佐久間とかいう男のもとに通っているそうだな。

明一郎 ああ。松代に引っ込んでいるのはもったいない方だ。おまえも今度、行って

みないか。

鏡吾 俺にそんな暇はない。おまえも仮病なんか使ってないで、勤めに出ろ。

明一郎 俺は他にやりたいことがあるんだ。

鏡吾 いいご身分だな。三年も仕送りをしてもらったくせに、まだ脛を齧る気か。

明一郎 何だと？ 俺を怒らせたのか？

鏡吾 忘れたのか？ 俺はおまえを一生許さないと云ったはずだ。

明一郎 そうだったな。邪魔したな。

明一郎が去る。

安政六年八月十日夕、江戸の上田藩上屋敷。南条がやってくる。

南条　なぜおぬしがここにいます。樹雨を見張れと言ったはずだぞ。
鏡吾　樹雨殿は姫君のお部屋です。まもなく夕餉の時刻。もう外に出かけることは
ないと思います。

南条　今日は一日、ここにいたのか。

鏡吾　昼過ぎに日本橋へ。樹雨殿は姫君のお遣いで、本を買いに行きました。
南条　本屋で誰かと会っていなかったか。

鏡吾　いいえ。
南条　では、行き帰りの途中で、どこかに立ち寄らなかったか。

鏡吾　いいえ、樹雨殿は誰とも会っていません。南条殿はやはり誤解しているので
南条　す。私はこの五日間、ずっと樹雨殿のそばにいました。怪しい素振りは一切

南条　見かけませんでした。
鏡吾　あの女は芝居がうまい。間抜けなおぬしを欺くことぐらい、わけもないのだ
ろう。いや、ひよっとすると、おぬしはわかかっていて、騙されているのかも
しれんな。

鏡吾　私を疑うのですか？
南条　怒るな。冗談だ。樹雨と話がしたい。ここへ呼んでこい。

鏡吾が去る。入れ替わりに、聞多がやってくる。木刀を二本持っている。

聞多 (南条に) あれ? 長谷川さんはどちらへ?

南条 樹雨を呼びに行った。

聞多 言ってくれば、私が行ったのに。

南条 剣の稽古か。長谷川が戻るまで、暇だ。相手をしてやろう。

聞多 いや、結構です。無事では済まない予感がするので。

南条 つまらん。ならば、今日の報告を聞かせてもらおう。

聞多 (懐から紙取り出して) この紙に書いてある八人の方は、今日も一日、この

上屋敷にいらつしやいました。どなたも外出していません。

南条 そうか。それならばいい。

聞多 南条さん、この八人は一体どういう人なんです?

南条 前に言っただろう。明一郎が連絡を取る可能性が有る者たちだ。

聞多 私は、明一郎さんと付き合があつた者を調べました。全部で十二人にいま

聞多 したけど、その人たちはこの中に入つてませんね。

南条 この八人は明一郎でなく、亡くなつた舟橋殿と関わりがあつたのだ。

聞多 なるほど。でも、ちよつとおかしくないですか? 明一郎さんにとって、こ

聞多 の八人は、自分が殺した父親の知り合いなんですよ。そんな人に助けを

聞多 求めたりするかな。

南条 あらゆる可能性を考えるのが、討ち手の仕事だ。

聞多 なるほど、勉強になりました。

鏡吾・樹雨がやってくる。

鏡吾 樹雨殿をお連れしました。
南条 (樹雨に)今日は日本橋の本屋へ行ったそうだな。白石はその本屋で会う

樹雨 約束だったのか。
南条 そんな約束はしていません。私は本を買いに行っただけです。

樹雨 俺は五日前から、長州藩の上屋敷に張り込んでいた。白石が出てきたのは、
南条 今日の昼過ぎだ。やつは東へ向かって、歩き始めた。おそらく、日本橋へ向

樹雨 かうつもりだったのだろう。が、俺は途中で白石を呼び止めた。
南条 白石様に何をしたのです。
樹雨 最初は話を聞くだけのつもりだった。しかし、向こうが刀を抜いたので、こ

樹雨 ちらも抜かざるを得なくなつた。
南条 まさか、斬つたのですか？
樹雨 安心しろ。命までは取っていない。しばらく寝込むことにはなるだろうが。

樹雨 それはずいですよ。いくら明一郎さんを見つめるためとは言え、他藩の人
南条 間に怪我を負わせるなんて。
樹雨 先に抜いたのは向こうの方だ。長州藩から抗議が来る心配はない。

樹雨 白石様を煽つて、わざと先に抜かせたのですね？
南条 俺はただ、明一郎の居場所を教えろと言っただけだ。
樹雨 それだけで抜くはずがありません。あなたは白石様をわざと傷つけたのです。
南条 あの方は何もしていないのに。

南条が聞多の手から木刀を奪つて、樹雨に剣先を向ける。

南条

鏡吾

南条

樹雨

南条

口が過ぎるぞ、樹雨。

（樹雨の前に出て）やめてください、南条殿。

（樹雨に）白石はもう何もできません。おぬしと明一郎を繋ぐ者はいなくなつたのだ。これから、どうやって明一郎と連絡を取る。

言つたはずです。私は兄とは何の関わりもありません。

芝居はもうたくさんだ。言え。明一郎の居場所はどこだ。

南条が鏡吾を突き飛ばす。聞多が木刀で南条に打ち込む。南条がかわして、聞多に打ち込む。聞多がかわして、転ぶ。

南条

聞多

鏡吾

南条

鏡吾

南条

鏡吾

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

おまえが俺にかなうと思つて居るのか？

思つていません。しかし、私は女子を傷つける人が大嫌いなんです。

南条殿、我々の役目は明一郎を討ち取ることです。それ以外の人を傷つけるのは許されません。

何を手ぬるいことを。俺たちが江戸に来て、今日で何日になる。十日だぞ。

焦ることはありません。上意に期限はなかったはず。

俺たちがこうしている間にも、明一郎は江戸を自由に動き回っている。放つておいたら、何を仕出かすかわからんだ。

明一郎が何を仕出かすと言うのです。

（懐から紙取り出して）ひよつとして、この八人に関係があるんじゃないですか？

何ですか、その紙は？

聞多

鏡吾

南条

鏡吾

聞多

鏡吾

南条

鏡吾

南条が鏡吾の腕を木刀で打ち、紙を奪い取る。鏡吾がひざまずく。

樹雨

南条

鏡吾様！

（鏡吾に）これだけは言っておく。おまえの役目は俺の補佐だ。余計なことに気を回すな。

南条が去る。

樹雨

鏡吾

聞多

鏡吾様、腕を見せてください。

大丈夫です。骨まではやられていない。

さすがに御前試合で五連覇しただけのことはありませんね。かわすのがやっとだった。

樹 鏡
多 吾

助けてくださって、ありがとうございます。（頭を下げる）
いや、あれじゃ、助けたことにはなりませんよ。しかし、南条さんは相当焦
っています。これ以上、シラを切り続けるのは難しいと思いますよ。
大佛様も、私が嘘をついているとお考えなのですか？
さあ、どうでしょう。ん？ この匂いはサンマの塩焼きですね。私はサンマ
には目がないんです。申し訳ありませんが、先に食べさせていただきます。
後はお二人だけでごゆっくりどうぞ。

聞多が去る。

樹 鏡
雨 吾

あの人には何もかも見抜かれていた気がしますね。
（懐から手紙を取り出して）鏡吾様、これを。
明一郎からの手紙ですか？（受け取って）いつの間。
私たちが日本橋へ行っている間に、ここに届いたのです。届けてくださった
のは、長州藩の方だそうです。
白石殿の同僚ですね？ ということは、白石殿は囚だったのか。
そうだと思います。あの方は、南条様に襲われるのを承知で、藩邸を出たの
です。
拝見します。（手紙を読む）
いかがですか？ 兄は何と書いてきましたか？
二人だけで会いたいと。（手紙を懐に入れて）これから出かけてきます。あ
なたはここで、いつも通りにしていてください。
私も連れて行ってください。

鏡 吾
樹 雨

それはやめた方がいい。下手をしたら、斬り合いになる。
でも、この前は。
覚えています。斬る斬らないは、あいつの話を聞いてから決めます。間違っ
ても、軽はずみなことはしません。
わかりました。ここで待っています。

樹雨が去る。

安政六年七月二十四日朝、舟橋家。南条がやってくる。

南条 鏡吾 おぬしが長谷川か。
（ひざまずいて）長谷川鏡吾と申します。先刻、遣いの方より、舟橋貞蔵殿

南条 鏡吾 の役宅へ参上せよとの命を受け、罷り越しました。
目付役の南条朔之助だ。堅苦しい態度は時間の無駄だ。立て。

南条 鏡吾 はい。（立つ）

南条 鏡吾 おぬしは舟橋明一郎と親しいそうだな？ 二、三、聞きたいことがある。

南条 鏡吾 その前に、何があつたか、教えていただけませんか。

南条 鏡吾 遣いの者は何も言わなかつたのか。

南条 鏡吾 はい。ただ、一刻も早く駆けつけろとだけ。

南条 鏡吾 おぬしが最後にここに来たのはいつだ。

南条 鏡吾 今年の二月です。

南条 鏡吾 二月？ 半年も前か。舟橋殿の妻女からはよく出入りをしていて聞いたが、

南条 鏡吾 それは以前の話です。この半年、明一郎とは顔を合せておりません。

南条 鏡吾 確かか。

南条 鏡吾 はい。一体、明一郎に何かあつたのですか？

南条 鏡吾 明一郎は昨夜、父親の舟橋殿を斬殺した。

鏡吾

今、何と？

遠くに、明一郎・貞蔵の姿が浮かび上がる。二人は激しい口論をしている。が、声は聞き取れない。明一郎が刀を抜き、貞蔵に斬りかかる。貞蔵がかわして、明一郎の腕をつかむ。明一郎が貞蔵の手を振り払って、貞蔵を斬る。貞蔵が倒れる。二人の姿が消える。

南条

その後の行方はわからん。おそろく、江戸へ向かったものと思われる。信じられない。きつと何かの間違いです。

鏡吾

なぜそう言い切れる。

南条

明一郎はそれほど愚かな男ではありません。舟橋殿を斬ればどうなるか、あいつにわからないはずがない。

鏡吾

しかし、この家の女中は、二人が激しく言い争う声を聞いている。声だけですか？ 明一郎が斬るのを見てはいないんですね？

南条

それは……。それは……。

鏡吾

女中の話によると、この一月、毎日のように口論していたそうだ。舟橋殿の娘が江戸へ出て、止める者もいなくなつたらしい。理由は、明一郎の素行の

南条

乱れ。病と称して、勤めを休み、隣国の兵学者の家へ通つていた。秘かに脱藩を企てていたという噂もある。おぬしは耳にしたことはないか。

鏡吾

舟橋様からお聞きしました。しかし、明一郎はそのようなことは一言も。それは半年前の話だろう。昨夜、明一郎は脱藩を宣言した。舟橋殿は反対し

鏡吾

た。怒り狂つた明一郎は、舟橋殿に刀を向けた。そうは考えられないか。有り得ません。明一郎はそんなことをする男ではない。

南条

鏡吾

南条

南条

鏡吾

南条

鏡吾

南条

南条が去る。

長谷川家。淑江がやってくる。

俺はこの目で遺体を見た。傷は一つ。肩から脇腹へかけて、ざっくりやられていた。明一郎は一年前まで、江戸へ剣術修業に行っていたそうだな？

外部の者の仕業とは考えられませんか？ そいつが舟橋様を斬って、逃げた。明一郎はその後を追った。

舟橋殿の命を狙う者がいたと言うのか。それは誰だ。わかりません。しかし、可能性としては考えられます。

もういい。明一郎には上意討ちの命が下された。家へ戻って、支度をしろ。午の刻には上田を発つ。

支度とは何のことです。俺は明一郎の顔を知らん。おぬしには俺の補佐として来てもらう。俺たち二人で明一郎を討ち取るのだ。

私に討ち手になれと仰るのですか？

おぬしを選んだのは、筆頭家老の司馬様だ。断らない方がいい。それに、この役目を無事に果たせば、おぬしには褒美が出る。

褒美？
司馬様はこう仰っていたぞ。おぬしを城に出仕させてやると。

淑江
鏡吾
淑江

何が出仕ですか。そんな言葉に釣られて、引き受けてはなりません。しかし、これは藩命なのです。そんなもの、逃げ道はいくらでもあります。急な病を得て、床に臥せった。

鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑 鏡 淑
吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江 吾 江

それでいいではありませんか。
私は南条殿にお会いしていません。そのような見え透いた嘘は通りません。
それでは、あなたは引き受けるのですか？ 明一郎殿を斬るのでですか？
私が断れば、別の者が行くでしょう。明一郎が斬られることに変わりはありません。
だったら、その人に任せればいいではないですか。何もあなたがやることはない。
母上、私はこの機会を逃したくありません。
機会？
父上が亡くなって、十三年。その間に、一度でも出仕の話がありましたか？
今までなかったということは、これから先もないということです。
そうとは限りませんよ。今の暮らしを地道に続けていれば。
米の飯もろくに食えない暮らしをですか？ 私はもつと人並みの暮らしがしたい。役宅に住んで、城勤めをして、休みの日には釣りに行って。父上が生きていた頃と同じ暮らしです。母上はあの頃の暮らしに戻りたくないのですか？
戻りたいに決まっています。でもね、鏡吾。それが明一郎殿の命と引き換えだしたら、私は遠慮します。
母上。
本当のことを言うて下さい。あなたは明一郎殿を斬りたくないのでしょうか？
当たり前ではないですか。十三年前、私はすべてを失いました。藩校も道場も。友人たちもみんな去っていききました。しかし、明一郎だけは残ってくれました。私を見捨てずに、ずっとそばにいてくれた。鏡吾、鏡吾と声をかけてく

鏡 淑 鏡 淑
江 江 吾 江

れた。それがどんなにうれしかったことか。
わかりますよ。明一郎殿はあなたにとってかけがいのない友です。
しかし、私には友より大事なものがあつた。

それは一体何です。

父上です。父上は私たちを守るために自裁なさつた。無実の罪を背負つて。
このご恩を忘れるわけには行きません。城に出仕して、名を挙げて、父上の
無念を晴らす。それが私の望みです。

父上のために友を斬ると言うのですか？ それで、父上が喜ばれると思いま
すか？

わかりません。が、せめて一言、「鏡吾、よくやった」と褒めていただきた
いと思いません。

淑江が去る。

八月十日夜、浜町の漁師小屋の前。明一郎がやってくる。

明一郎 鏡吾、やっと会えたな。おまえが来るのを、首を長くして待っていたんだ。

鏡吾 少し痩せたな。

明一郎 そんなことはない。毎日、腹一杯食って、よく寝ている。

鏡吾 だとしたら、やつれたんだ。気疲れのせいだろう。

明一郎 おまえの方こそ、あまりいい顔色ではないぞ。

鏡吾 俺は上意を受けて、江戸へ来た。おまえの討ち手に選ばれたんだ。

明一郎 知っている。樹雨が文に書いてきた。

鏡吾 俺はおまえを斬らなければならぬ。しかし、その前に、話が聞きたい。なぜ舟橋様を斬ったのか。

明一郎 ここへは一人で来たのか。

鏡吾 無論だ。二人だけで会いたいと言ってきたのはおまえだろう。

明一郎 中へ入れ。狭い所だが、茶ぐらいは淹れてやる。

鏡吾 ここは誰の家なんだ。

明一郎 この近くに住む、漁師の小屋だ。昔、練兵館の仲間と船で釣りをしたことが

ある。その船の持ち主だ。大した付き合もないのに、快く貸してくれた。

鏡吾 さあ、入れ。

明一郎

鏡吾 その前に、さっきの質問に答えてくれ。

明一郎 親父を斬った理由か。

鏡吾 そうだ。俺にはいまだに信じられない。おまえは本当に舟橋様を斬ったのか。

明一郎 ああ、斬った。

鏡吾 理由は何か。脱藩に反対されたからか。

明一郎 聞いてどうする。それで俺の罪が許されるのか。

鏡吾 俺は本当のことが知りたいんだ。おまえだって、俺に話したくて、ここへ呼

鏡吾 んだんじやないのか？ おまえは今、何を考えている。今のおまえの望みは

何だ。

明一郎 俺の望みか。いいだろう。教えてやる。

明一郎が抜刀し、鏡吾に斬りかかる。鏡吾がかわす。

鏡吾 何をやる。

明一郎 間抜けなやつだな。一人でのこのこやってくるとは。

明一郎が斬りかかる。鏡吾がかわして、抜刀する。

鏡吾 やめろ、明一郎。どういうつもりだ。

明一郎 俺の望みはな、鏡吾、おまえを道連れにすることだ。

明一郎が斬りかかる。鏡吾が避けて、斬り返す。激しい斬り合い。明一郎が斬りかかる。鏡吾がかわして、明一郎の肩を斬る。明一郎がひざまずく。

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾が明一郎を殴る。

どうした。止めを刺せ。

おまえ、また手を抜いたな。

何を言っている。

最後の一手だ。俺がかわせるように、狙いを外しただろう。

言いがかりだ。さっさと斬れ。

なぜだ。なぜわざと斬られるような真似を。

おまえの望みを叶えるためだ。

何だと？

俺を討ち取れば、手柄になる。おまえは城に出仕できるはずだ。さあ、斬れ。斬って、望みを叶えろ。

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

ふざけるな！

……

俺はおまえを信じていた。おまえだけは、俺を身分で区別しないと。他の連

中のように、労りを口にしながら、腹の底で憐れんだりしない。まことの友

だと思っていたんだ。

……

おまえも他のやつらと同じだ。いや、もつと質が悪い。おまえが手を抜いた

のは、俺を侮ったからだ。長谷川鏡吾は自分より劣る。助けてやるのは当然

だ。そう思ったんだ。

明一郎

おまえの言う通りだ。俺は驕っていた。御前試合の時はそれがわからなかった。勝ちを譲るのは友として当然の勤めだと思っていたんだ。しかし、今ならよくわかる。おまえのためを思うなら、正々堂々と戦うべきだったんだ。わかつているなら、なぜ同じことをした。

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

あの時とは違う。おまえは俺を斬るべきだ。俺はおまえの仇の息子なんだ。仇？
親父はおまえの父上を陥れた。親父が殺したんだ。
どういう意味だ。

貞蔵がやってくる。

貞蔵

明一郎

貞蔵

明一郎

貞蔵

明一郎

貞蔵

明一郎

貞蔵

明一郎

貞蔵

明一郎

待て、明一郎。どこへ行くつもりだ。
江戸へ戻ります。蘭学塾に通って、最新の兵学を身につけたいんです。
そんなことが許されると思っているのか。おまえには勘定役という勤めがあるのだ。
許していただけないなら、脱藩します。
なぜ江戸へ行かなければならない。兵学なら、佐久間の元で学べるだろう。
佐久間先生は遅れています。田舎に引っ込んでいては、新しい知識が入ってこないんです。
どうしても行くと言うなら、親子の縁を切るぞ。
構いません。
俺の助けなしでどうやって生きていく。野垂れ死にしてもいいのか。
構いません。このままここにいるよりはマシです。

貞蔵

勘定役がそんなにいやか。今は下つ端でも、仕事に励めば、出世できる。奉行まで昇りつめれば、藩の政にも意見が言えるようになる。

明一郎

私は父上とは違う。出世には興味がないんです。

貞蔵

奇麗事だけでは生きていけないぞ。長谷川のようになってもいいのか。

明一郎

長谷川？ 鏡吾のことですか？

貞蔵

違う。鏡吾の父親だ。あいつもおまえと同じことを言った。出世には興味がないと。その結果はどうだ。重罪人の汚名を着せられ、腹を切らされたではないか。

明一郎

汚名を着せられたとはどういうことです。

貞蔵

忘れろ。つい口が滑った。

明一郎

鏡吾の父上は無実だったのですか？ 公金横領をしてはいなかったのですか？

貞蔵

俺は忘れろと言ったはずだ。

明一郎

まさか、あなたが鏡吾の父上を。

貞蔵

仕方なかったのだ。あいつは帳簿のごまかしに気づいてしまった。俺はあいつに目を瞑れと言った。出世したければ、黙っている。しかし、あいつは奉行に訴え出した。その奉行が首謀者であるとも知らずに。

父上は知っていたのですか。

明一郎

奉行の命令で、帳簿に嘘の数字を書いていた。断るわけには行かなかった。

貞蔵

つまり、共犯者だったのですね？

明一郎

俺は一銭も受け取っていない。あいつに罪を被せたのも奉行だ。

貞蔵

なぜ鏡吾の父上を助けなかったのです。

明一郎

そんなことをすれば、俺も腹を切らされていた。舟橋家を守るためには、黙

貞蔵

っているしかなかった。

明一郎

嘘だ。あなたは家でなく、自分を守ったんだ。

貞蔵

それは違う。俺には妻と息子と娘がいた。三人を路頭に迷わすわけには行かなかった。

明一郎

鏡吾の父上にだって、家族はいました。叔母上と鏡吾が。

貞蔵

あいつも家族のためを思うなら、奉行に取り入れればよかったのだ。つくづく愚かな男だ。

明一郎

今、何と仰いました？

貞蔵

愚かな男だと言ったんだ。世の中、奇麗事だけでは生きていけん。子供でもわかる理屈だ。

明一郎が抜刀し、貞蔵に向ける。

貞蔵

明一郎、何のつもりだ。

明一郎

私はあなたを許さない。絶対に。

明一郎が貞蔵を斬りかかる。貞蔵が避けて、明一郎の腕をつかむ。明一郎が貞蔵の手を振り払い、貞蔵を斬る。貞蔵が倒れる。明一郎が納刀する。貞蔵の姿が消える。

鏡吾

明一郎、おまえは俺のために舟橋様を斬ったのか。

明一郎

俺は親父を尊敬していた。頭は古いが、武士としてはまじめで、立派な人だと思っていた。が、実際はどうだ。上司とともに不正を働き、それに気づいた同僚を見殺しにした。何から何まで嘘っぱちだったんだ。

鏡吾

それでも、舟橋様はおまえの父親だ。

明一郎

そうだ。俺は父親を殺した極悪人だ。いや、それだけじゃない。父親が犯した罪に気づかず、のうのうと生きてきた。勘定奉行の息子として、豊かな暮らしを満喫してきた。おまえのかわりに。

鏡吾

俺のかわり？

明一郎

十三年前に横領が発覚していたら、親父は切腹させられていた。俺とおまえの人生は逆になっていったんだ。俺はおまえの人生を奪った。おまえに斬られて、当然なんだ。

鏡吾

それは違う。おまえは何も知らなかったのだから。

明一郎

俺の話はここまでだ。さあ、斬れ。斬って、おまえの人生を取り戻せ。

樹雨がやってくる。

樹雨

兄上！

鏡吾

樹雨殿、なぜここに。

樹雨

申し訳ありません。兄の文を、鏡吾様にお渡しする前に読んだのです。兄のことが心配で。

明一郎

樹雨、上屋敷へ戻れ。ここはおまえの来る所ではない。(呻き声をあげて、ひざまずく)

樹雨

兄上！(駆け寄って)この傷は？ 鏡吾様が斬ったのですか？

鏡吾

そうです。明一郎がわざと斬らせましたんです。

樹雨

わざと？

明一郎

鏡吾、樹雨には何も言うな。

鏡吾

わかつている。(樹雨に)中で手当てをしましょう。手を貸してください。

鏡吾・樹雨が明一郎を支えて去る。

八月十一日夕、江戸の上田藩上屋敷。南条がやってくる。懐から紙を取り出して、見つめる。聞多がやってくる。木刀を二本持っている。南条の姿を見て、背中を向ける。

1
1

南条

聞多

南条

聞多

南条

聞多

南条

聞多

南条

聞多

南条

どこへ行く。(紙を懐にしまう)

いや、庭で素振りでもしようかと思っただんですが、お邪魔なようだったので呑気なやつだ。その様子だと、樹雨はまだ戻ってきていないようだな。

はい。昨夜、下屋敷へ行くと言って、ここを出てから、もう丸一日になりません。奥勤めの方々は、何か事件に巻き込まれたのではないか、番所に届けた方がいいのではないかと騒ぎ始めています。

その必要はない。あの女は明一郎の所にいるのだ。私もその可能性が高いと思います。南条さんに脅されて、ここにいるのが怖くなつたんでしょう。

やはり、あの女は明一郎の居場所を知っていた。おぬしが止めなければ、口を割らせることができたのだ。

面目ありません。日頃、母親から、女子は大切にしろと言われているもので、いい歳をして、いつまでも母親の言いつけにとらわれるな。

ところで、さっきの紙は何ですか？ 例の八人の名前が書いてあるやつですか？ 違う。

聞多

私は国元の事情に疎いので、同僚に聞いてみたんですよ。そうしたら、その八人の方々は、先代の筆頭家老のお仲間だそうですね。筆頭家老が司馬様に代わって、次々と江戸へ送られた。つまり、左遷させられたわけです。当然、司馬様のことは快く思っていない。

聞多

それがどうした。

聞多

南条さんはこう考えているんじゃないですか？ 明一郎さんはその方々と協力して、司馬様の失脚を狙っているのではないかと。

聞多

馬鹿馬鹿しい。父親を殺した男に、なぜそんな大それたことができる。

聞多

問題はそこなんてす。そこがどうしてもわからない。南条さんはどう思います？

聞多

俺に聞くな。馬鹿馬鹿しい。

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

鏡吾がやってくる。

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

聞多

南条殿、ただいま戻りました。どうだった。白石には会えたのか。ええ、ほんの少しだけ。白石様は床に臥せていました。悪いやつに襲われて、大怪我をしたんですよ。かわいそうに。で、樹雨さんの居場所は？

南条

鏡吾

南条

聞多

南条

南条が去る。

おぬしは黙っている。(鏡吾に) そもそも樹雨がなくなったのは誰のせいだ。昨夜、おぬしが目を離したからだろう。

申し訳ありませんでした。

その時、おぬしはどこにいた。本当に大佛の部屋にいたのか。

それは私が保証しますよ。二人で将棋を指していました。十勝零敗で、私の

圧勝でした。

もういい。外へ出てくる。

どちらへ？

長州藩邸だ。白石は必ずもう一度、明一郎と連絡を取る。そこを捕まえて、

明一郎の居場所を吐かせるんだ。

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

南条さんは白石って人がよっぽど嫌いなんでしょうね。子供の頃のいじめっ子に顔が似ているのかもかもしれません。すみません、口裏を合わせていた দিয়ে。それは構いませんけど、そろそろ事情を教えてくださいませんか？

あと一晩だけ待ってください。明日になったら、必ず。

今夜のうちに逃がすんですか？ 明一郎さんを。

大佛殿、私は明一郎の居場所を知りません。

心配しないでください。私は誰にも告げ口しません。特に南条さんには絶対に。しかし、明一郎さんを逃がしたら、あなたは藩命に背くことになる。バレたら、切腹か追放です。その覚悟はおありですか？

鏡 吾
聞 多

正直言つて、決心がつきません。まだ迷っています。最悪の場合、南条さんと斬り合うことになる。その覚悟は？

鏡 吾
聞 多

全く自信がありません。あなたが勝てない相手に、私が叶うわけがない。今はね。しかし、あなたはあなたが思っている以上に強い。工夫によっては、

鏡 吾
聞 多

南条さんと五分の戦いができるかもしれない。まさか。私には信じられませんが、

鏡 吾
聞 多

長谷川さん、あなたは道場に通ったことがない。だから、剣の基本がわかっていないんです。基本とは何ですか。

鏡 吾
聞 多

相手を見ることです。私は見ているつもりですが。

鏡 吾
聞 多

剣先だけじゃないんですか？ 目の動き、足の向き、体のどこに力が入っているか。それらを一瞬で把握するんです。それができなければ、南条さんには歯が立たない。あの人の構えを覚えていきますか？

はい、剣先が体の後ろに隠れていました。ちよつと構えてみてください。

鏡 吾
聞 多

聞多が鏡吾に木刀を渡す。二人が向かい合つて、木刀を構える。聞多は正面から剣先が見えない構え。

剣先じゃなくて、私を見てください。行きますよ。はい。

聞多が鏡吾に打ち込む。鏡吾が避けるが、聞多はさらに打ち込む。

聞多

どうでした？

鏡吾

驚きました。思ってもいない所から、剣先が出てきた。

聞多

だから、剣先じゃなくて、私を見るんだってば。全身を隈なく観察するんです。もう一度、行きますよ。

聞多が同じ構えをして、聞多が鏡吾に打ち込む。鏡吾が受けて、打ち返す。

聞多

少しはわかってきましたね。

鏡吾

まだまだです。これでは、最初の一撃をかわすだけで、精一杯だ。

聞多

なるほど。では、体を低く構えてみてください。

鏡吾が腰を落として構える。聞多が鏡吾に打ち込む。鏡吾が避けるが、聞多がさらに打ち込む。

聞多

もっと低く。相手が狙える範囲を狭くするんです。

鏡吾がさらに腰を落して構える。聞多が鏡吾に打ち込む。鏡吾が避けるが、聞多がさらに打ち込む。

聞多

もう一度。

鏡吾がさらに腰を落して構える。聞多が鏡吾に打ち込む。鏡吾が受けて、打ち返す。

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

聞多

鏡吾

聞多

その調子です。後は、動きをもっと速くすることですね。

大佛殿、ご教示、ありがとうございます。（頭を下げる）

いやだな、頭を上げてくださいよ。一応言っておきますけど、あなたと南条

さんが戦うことになっても、助太刀はしませんからね。藩命に背く人を助け

るわけには行きません。

わかっていきます。しかし、あなたという人は本当に変わっていますね。私の

ような人間に力を貸してくださいさるなんて。

違いますよ。相手があなただったから、力を貸したんです。

大佛殿、あなたの望みは何ですか。

何ですか、いきなり。

出世ですか？ 剣の腕を磨くことですか？

そうだな。馬鹿だつて笑われるかもしれないけど、異国へ行ってみたいんです

ね。私は江戸生まれの江戸育ちなんです、よその土地へ行つたことがないんです

す。どうせ行くなら、誰も行ったことのない土地へ行きたい。メリケンとか、

エゲレスとか。

行けますよ、いつかきつと。

実を言うと、去年から麹町の蘭学塾へ通い始めたんです。エゲレス語を学ば

うと思つて。もしかすると、そこで明一郎さんと擦れ違ったことがあるかも

しれません。

あいつの望みは、この国を動かすことでした。私と二人で。

それはまた大きな望みだ。何とか叶うといいですね。

鏡吾
聞多

出かけてきます。南条殿には、樹雨殿を探しに行つたと伝えてください。
B e c a r e f u l ,
M r .
H a s e g a w a !

鏡吾が去る。聞多も去る。

① 八月十一日夕、浜町の漁師小屋。明一郎がやってくる。後を追って、樹雨がやってくる。

樹雨 兄上、まだ起きては駄目です。布団にお戻りください。

明一郎 鏡吾はどこだ。

樹雨 上屋敷へ戻られました。南条様の様子を見てくると仰って。

明一郎 今は夕方だな？ ということは、あれから丸一日経ったのか。

樹雨 そうです。兄上はずっと眠っていたのです。

明一郎 この程度の傷で情けない。

樹雨 上田を出てから、あまり寝ていなかったのではなないですか？ その疲れが出たんですよ。（明一郎の額を触って）まだ熱があります。横になってください。

明一郎 すまなかつたな。おまえを巻き込んで。

樹雨 私は自分の意志でここへ来たのです。

明一郎 こうして、また会えるとは思わなかつた。これでもう心残りはない。上屋敷へ戻れ。

樹雨 兄上を放っておくわけには行きません。

明一郎 俺はここでもう一度、鏡吾と斬り合いをする。鏡吾が戻ってきたら、すぐにだ。それをおまえに見せたくない。

樹雨

斬り合いなどしないで、逃げてください。鏡吾様ならきつとわかってくださいます。

明一郎

それはできない。俺がしたことは許されないことだ。

樹雨

兄上。俺が死んでも、鏡吾を恨むな。あいつは自分の役目を果たさなければならぬ。悪いのは全部俺なんだ。

鏡吾がやってくる。

鏡吾

明一郎、目を覚ましたのか。

明一郎

待たせて悪かったな。昨夜の続きをやるう。その体で刀が振れるものか。(樹雨に)後は私が引き受けます。上屋敷へお帰りください。

樹雨

鏡吾様、兄を見逃してください。やめろ、樹雨。

樹雨

(鏡吾に)兄は父が憎くて斬ったのではない。何か別の理由があったのです。兄は教えてくれませんが、私にはわかります。どうか兄を許してやってください。

鏡吾

樹雨殿のお気持ちはわかりました。明一郎と二人だけで話をさせてください。(樹雨に)鏡吾の言う通りしろ。上屋敷へ戻れ。

明一郎

いやです。話が済むまで、外で待っています。

樹雨

私だって、もっと兄上とお話したい。終わったら呼んでください。

樹雨が去る。

明一郎

(鏡吾に) すまん。聞き分けがなくて。

鏡吾

おまえが謝ることはない。樹雨殿はおまえを助けたい一心なんだ。

明一郎

鏡吾、親父がしたことは樹雨に言わないでくれ。いずれは知ることになるだ

鏡吾

ろうが、今はまだ。

明一郎

自分一人が悪者になるつもりか。

鏡吾

俺はそれで構わない。さあ、外に出て、昨夜の続きを始めよう。

明一郎

待て、明一郎。俺は丸一日考えて、答えを出した。俺はおまえを逃がす。

鏡吾

何を言い出すんだ。

明一郎

おまえにはやりたいことがあるはずだ。最後まで諦めるな。

鏡吾

俺が逃げたら、おまえはどうなる。役目をしくじったことになるぞ。

明一郎

構うものか。友を殺してまで、城に出仕したいとは思わない。次の機会を待

鏡吾

つさ。

明一郎

鏡吾。

② 漁師小屋の外。樹雨がやってくる。反対側から、南条がやってくる。

南条

妙な所で会うものだ。おぬしは品川の下屋敷へ行つたと聞いたが。

樹雨

それは何かの間違いです。私は泊まりがけで、成田山の新勝寺に行つてまい

南条

りました。今はその帰り道で。漁師小屋に何の用だ。たった今、あそこから出てきただろう。

樹雨 たくさん歩いて疲れたので、中で少し休ませてもらったんです。
南条 ますます妙だな。長谷川によく似た男が入っていくのも見かけたが。
樹雨 それは見間違いではないですか？ 中には誰もいませんでしたよ。
南条 そうか。しかし、念のために、確かめてみよう。
樹雨 わかりました。でしたら、私が先に。
南条 その必要はない。おぬしはここで待っている。
樹雨 お待ちください。

樹雨が南条の腕をつかむ。南条が樹雨を突き飛ばす。樹雨が倒れる。南条が去る。樹雨が「南条様！」と叫び、後を追って去る。
③ 漁師小屋の中。

鏡吾 この小屋の持ち主に頼んで、船を借りよう。それに乗って、海へ出るんだ。
明一郎 鏡吾、樹雨を頼む。
鏡吾 心配するな。無事に上屋敷へ連れて帰る。
明一郎 そうじゃない。俺はおまえに、樹雨をもらってくれと言っているんだ。
鏡吾 いきなり何を言い出す。
明一郎 樹雨の気持ちはわかってるだろう。あいつは、おまえ以外の男と夫婦になりたくなかった。だから、江戸へ行くことを選んだんだ。
鏡吾 俺と樹雨殿では身分が違いすぎる。
明一郎 それは以前の話だ。今は父親を殺した男の妹。そんな娘をもらってくれる男はおまえぐらいしかいない。
鏡吾 その話は後だ。船を借りてくる。

明一郎

待て、鏡吾。もう一つ、おまえにもらってほしいものがある。(懐から手紙を取り出す)

鏡吾

それは何だ。

明一郎

おまえに宛てて書いた遺書だ。それともう一つ、大事なものが入っている。

鏡吾

大事なもの？

漁師小屋の土間。南条がやってくる。後を追って、樹雨がやってくる。

樹雨

お待ちください、南条様！

南条

出てこい、長谷川。出てこないなら、こちらから行くぞ。

南条が奥の部屋に入る。誰もいない。後から樹雨も入る。

樹雨

ご覧の通りです。ここには誰もおりません。

南条

(手拭いを拾って)この手拭いは何だ。血がついているぞ。

樹雨

さあ、私は存じません。

南条

気配に気づいて、裏口から逃げたか。樹雨、おぬしは上屋敷へ戻れ。兄が死ぬところは見たくないだろう。

④ 南条が走り去る。樹雨が「南条様！」と叫び、後を追って去る。

④ 神社。鏡吾・明一郎が走ってくる。

鏡吾

大丈夫か、明一郎。

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

鏡吾

明一郎

南条がやってくる。

南条

明一郎

鏡吾

南条

鏡吾

南条

明一郎

南条

明一郎

南条

明一郎

まずいな。目眩がしてきた。そこに座れ。少し休んだ方がいい。危ないところだったな。樹雨が大声を出してくれたおかげで助かった。(呻

き声をあげて、ひざまずく)

あまり喋るな。傷に障る。

南条というのは何者だ。やはり俺の討ち手か。

国元の目付役だ。恐ろしく腕の立つ。

(見て) おまけに足も速い。見ろ。もう追いつかれたぞ。

おぬしが舟橋明一郎か。余計な面倒をかけてくれたな。申し訳ありません。

(南条に) 私をつけてきたんですか？

おまえが下手な嘘をつくからだ。おまえは白石に会ってきたと言ったが、

会えるはずはない。もうこの世にはいないのだから。

あなたは白石殿を殺したんですか？

安心しろ。目撃者はいない。この件で、上田藩に迷惑がかかることもない。

それより、長谷川。おぬし、明一郎を逃がすつもりか？

違いますよ、南条殿。鏡吾は私を斬ろうとしました。この傷がいい証拠です。

(鏡吾に) なぜ止めを刺さなかった。

私が命乞いをしたからです。見逃してほしいと。鏡吾は呆れて、刀を納めた。そこへ、あなたがいらっしやっただけです。

南条 ならば、続きを見せてもらおう。長谷川、刀を抜け。断れば、俺がおまえを斬る。

明一郎 鏡吾、ここまでだ。諦めよう。(抜刀する)

鏡吾 明一郎。

明一郎 怪我人だからと言って、手を抜くなよ。どうせなら、本気でやろう。
鏡吾 わかった。

鏡吾が抜刀する。二人が構える。明一郎が斬りかかる。鏡吾が避ける。激しい戦い。明一郎が斬りかかる。鏡吾が避ける。

明一郎 よく避けたな。以前とは別人だ。

鏡吾 余計な口をきくな。

鏡吾が明一郎に斬りかかる。明一郎が避ける。激しい戦い。明一郎が鏡吾に斬りかかる。鏡吾が避けて、明一郎に斬りかかる。明一郎が避けて、膝をつく。鏡吾が止まる。

南条 どうした。それで終わりか。

鏡吾 俺にはできません。

南条 もう、いい。おまえは引っ込んでいろ。(抜刀し、明一郎に歩み寄る)
鏡吾 やめてください!

鏡吾が南条に斬りかかる。南条が避ける。

南条

鏡吾

南条

鏡吾

南条

明一郎

南条

鏡吾

南条

鏡吾

南条

明一郎

南条

明一郎

鏡吾

南条

明一郎

何のつもりだ。

（刀を向けて）手出しは無用に願います。これは俺と明一郎の勝負です。

片腹痛いな。おぬしらがやっていることは、すべて茶番だ。俺が油断したら、斬りかかってくるつもりだろう。

なぜ私たちがそんなことを。

帳簿の写しは、どちらが持っている。長谷川か。明一郎か。

何のことです。

とぼけても無駄だ。おぬしの父親がいつも身につけていた紙切れだ。おぬし以外に、持ち出せた者はいない。

紙切れとは一体何です。

舟橋は司馬様にこう言ったのだ。自分はこの時の帳簿の写しをを持っている。自分を切り捨てようとしたら、直ちに殿に訴えると。あいつは司馬様を信用

していなかった。証拠を楯にして、自分の身を守っていたんだ。

それで今度は、明一郎が同じことをしようとしていると言うんですか？

あるいは、殿に訴えようとしている。司馬様の失脚を願う、誰かの差し金で。

それは誤解です。私は誰の命令も受けていません。

そうか。持っていることは認めるんだな。

南条殿、聞いてください。（懐から手紙を取り出し）私がこれを持ち出し

たのは、鏡吾に渡すためです。これさえあれば、鏡吾の父上の無実が証明でき

きる。公金横領の汚名を雪ぐことができます。

そうか。おまえが言っていた大事なものは、帳簿の写しのことだったのか。

（明一郎に）こちらによこせ。

あなたはこれをどうするつもりです。

南条

司馬様はこう仰った。見つけ次第、破り捨てろと。

明一郎

だったら、あなたに渡すわけには行かない。(手紙を懐に入れる)

南条

だったら、力づくでいたただけだ。舟橋明一郎、覚悟しろ。

南条が明一郎に斬りかかる。明一郎が避ける。鏡吾が南条に斬りかかる。南条が避けて、鏡吾に斬りかかる。激しい切り合い。南条が鏡吾に斬りかかる。鏡吾が避けて、ひざまずく。

明一郎

鏡吾！

明一郎が南条に斬りかかる。南条が避けて、明一郎の腹を斬る。明一郎が倒れる。

鏡吾

明一郎！

南条が明一郎の懐から紙を取り出し、引き裂く。

鏡吾

やめろ！

鏡吾が南条に斬りかかる。南条が避ける。南条が剣先を背中に隠す構え。鏡吾も腰を低く落として構える。

南条

小賢しい真似を。

南条が鏡吾に斬りかかる。鏡吾が避けて、南条に斬り返す。激しい斬り合い。南条が鏡吾に斬りかかる。鏡吾が避けるが、刀を落とす。

南条 どうした。もう終わりか。

南条が鏡吾に斬りかかる。鏡吾が避けるが、腕を斬られる。南条がさらに斬りかかる。鏡吾が南条の腕を取って、その刀で南条の足を斬る。南条がひざまづく。明一郎が鏡吾に刀を投げる。鏡吾を取って、南条の頭を斬る。南条が倒れる。鏡吾が明一郎に駆け寄り、体を抱き起こす。

鏡吾 明一郎、すっかりしろ。

明一郎 南条殿は。

鏡吾 心配するな。俺が斬った。

明一郎 おまえ、強くなったな。楽しかったぞ。本気でやり合えて。

鏡吾 俺もだ。俺も楽しかった。

明一郎 俺を討ち取ったのはおまえだ。堂々と褒美をもらえ。

鏡吾 明一郎。

明一郎 おまえの望みを叶えろ。いいな。

鏡吾 俺はおまえの望みを叶えたかった。

明一郎 俺の望みはおまえの望みだ。前へ進め、鏡吾。(目を閉じる)

鏡吾 明一郎！

鏡吾・明一郎・南条の姿が見えなくなる。

八月十二日昼、江戸の上田藩上屋敷。樹雨・聞多がやってくる。

聞多
樹雨

なるほど。長谷川さんと明一郎さんは裏口から逃げたんですか。南条様は急いで飛び出していききました。私も後を追ったんですが、南条様を見失ってしまつて。あちこち走り回つて、あの神社に辿り着いた時には、もう。

聞多

長谷川さんの報告によると、最初に明一郎さんが南条さんを斬つて、その明一郎さんを、長谷川さんが斬つたそうです。

樹雨

鏡吾様が兄を？ 本当ですか？

聞多

長谷川さんはあなたに何も言わなかったんですか？

樹雨

私は兄の姿を見た途端、体中の力が脱けてしまつて。後のことは何も覚えていないんです。

聞多

お兄さんのこと、お悔やみ申し上げます。

樹雨

ありがとうございます。結局、兄には話せませんでした。父の病のことを。

聞多

それを伝えて、どうするつもりだったんですか？

樹雨

父が兄に勤めを継がせようとしたのは、自分の死期が迫っていたからです。

聞多

自分がいなくなる前に、兄を一人前の勘定役にしておいた。兄の幸せを願っていたのです。そのことを、どうしても兄に知っておいてほしかつた。

聞多 親の心、子知らずってやつですね。でも、今頃はあの世で仲直りしているか
もしれませんよ。
樹雨 そうですね。そう思うことにします。

鏡吾がやってくる。

鏡吾 樹雨殿、起きてても大丈夫なんですか？
樹雨殿、昨日、私をここへ連れて帰ってくださいだったのは、鏡吾殿ですか？
ええ。昨日、私をここへ連れて帰ってくださいだったのは、鏡吾殿ですか？
鏡吾 そうです。覚えていないのですか？
樹雨 すみません。こんな時こそ、しっかりとしなければいけないのに。
鏡吾 明一郎の遺体はこの近くの寺に運びました。ご案内します。
樹雨 鏡吾様、あなたが兄を斬ったというのは本当ですか？
鏡吾 本当です。私が斬りました。
樹雨 私は見逃してくれとお願いしたはずですが。
鏡吾 あなたを裏切る結果になってしまつて、申し訳ないと思っています。しかし、
樹雨 明一郎は南条殿を斬った。見逃すわけには行きませんでした。
鏡吾 兄よりも、お役目を選んだのですね？
樹雨 そう思われても、仕方ありません。さあ、寺へ行きましょう。
鏡吾 案内は結構です。一人で参ります。
樹雨 樹雨殿、私は明日の朝、上田へ戻ることになりました。ですから、明一郎の
鏡吾 葬儀には出られません。
樹雨 兄もその方がうれしいと思います。明日、お見送りはいたしません。
鏡吾 それでは、お会いするのはこれが最後ですね。どうかお元気で。

樹雨

鏡吾様もお元気で。

樹雨が去る。

聞多

いいんですか？ 樹雨さんに誤解されたままで。

鏡吾

構いません。明一郎を助けられなかったのは事実ですから。

聞多

自分を責めるのはやめてください。あなたはあなたにできるだけのことをしたんですから。

鏡吾

大佛殿、短い間でしたが、お世話になりました。

聞多

いやだな、改まって。

鏡吾

あなたのおかげで、敵に打ち勝つことができました。このご恩は一生忘れません。

聞多

私もあなたのことには忘れませんよ。明一郎さんという人がいたことも。

鏡吾

ありがとうございます。

聞多

長谷川さん、泣きたい時は、思い切り泣いた方がいいですよ。こんな胸でよ

鏡吾

かったですら、いつでもお貸ししますよ。

聞多

お気持ちだけいただきます。私は泣きたくなどありません。

鏡吾

わかりました。上田へ帰っても、剣の稽古を続けてくださいね。

聞多

もちろんです。大佛殿も英語の勉強、頑張ってください。

鏡吾

鏡吾が去る。聞多も去る。

聞多

八月十七日昼、長谷川家。淑江がやってくる。反対側から、鏡吾がやってくる。

鏡 淑
吾 江

鏡 淑 鏡 淑
吾 江 吾 江

淑 鏡 淑
江 吾 江

鏡 淑 鏡
吾 江 吾

鏡 淑
吾 江

淑
江

お帰りなさい、鏡吾。お城の様子はいかがでしたか？

母上、喜んでください。来月から、城に出仕することになりました。禄も今までの二倍に増やしていただけるそうです。五石が十石になっても、大した違いがありませんが。

それで、あなたのお役目は？

郷方回りです。今月中に、組屋敷に引越すように言われました。

おめでとう、鏡吾。しつかり仕事に励むのですよ。

ありがとうございます。私はこれから、郡奉行殿の役宅へご挨拶に行つてきます。それから、直属の上司になる方の所へも。

そうそう。舟橋様のご家族について、何か聞きましたか？

いいえ。

これはお隣から聞いた話なんです。舟橋様の奥様と樹雨さんは近々、佐倉藩へ移られるそうです。奥様のご親戚が佐倉にいらつしやつて、そこに身を寄せるとか。樹雨さんはそこのご長男と夫婦になられるとのことでした。

そうですか。それはよかったです。

私はあなたと一緒にほしかった。あなたもそうではなかったのですか？

滅相もない。樹雨さんは私にとつて、ずっと高嶺の花でした。それより、私は母上にお詫びしなければならぬことがあります。

何ですか、お詫びとは。

私は父上のことを疑っていました。口では無実だと言いながら、それで切腹を受け入れるはずがない、父上にも何か落ち度があったのではないかと。し

かし、母上の仰る通りでした。父上は潔白でした。そうです。だから、あなたは堂々と仕事をすればいいのです。

鏡吾

努力して、必ず出世します。そしていつの日か、父上の汚名を雪いでみせます。

淑江

楽しみにしていますよ。それより、他の方にも、勤めが決まったと知らせてきたらいかがです。お友達とか。

鏡吾

私に友はいません。明一郎以外には一人も。

鏡吾

そうですか。でも、お城に出仕すれば、すぐに気の合う人が見つかりますよ。母上、私は友はいりません。明一郎がいれば、それでいいのです。それでは、

淑江

行つてまいります。気をつけて。

鏡吾

鏡吾が去る。淑江も去る。千曲川の川原。鏡吾がやってくる。木刀で素振り始める。

鏡吾

明一郎、見ていてくれ。

明一郎

明一郎がやってくる。

鏡吾

鏡吾！

明一郎

鏡吾は素振り続ける。その姿を、明一郎が笑顔で見つめている。